『南アジア言語文化』第 9 号（2018 年 3 月）

音節とマートラー：インド韻律の基礎概念

— 韻律学，音韻学，文法学からの検証 —

阪本（後藤）純子

0. 序

ヴェーダ韻律とその後裔である古典サンスクリット韻律は，1 詩節に含まれる音節の数と量（軽重）により定められる。他方，中期インドアーリャ語の段階になると，マートラー *mā́trā-*「（発音に要する）時間単位」によって定められる韻律が現れる。音節とマートラーはインド韻律の基礎であるが，それらの概念は，従来，必ずしも明確に理解されて来なかったように思われる。

Pāṇini を初めとする文法学，Prātiśākhya と呼ばれるヴェーダ諸学派の音韻学，さらに Piṅgala の Chandaḥsūtra 等の韻律学の間には，音節の構成と境界，軽重，マートラーに関して大きな見解の相違が見られる。それらの問題を主要な原典に基づき検証し，インド韻律を理解するための基本資料を提供したい。[1]

---

[1] 本稿は印度学仏教学会第 62 回学術大会（龍谷大学 2011 年）における口頭発表および配布資料を加筆修正したものであり，平成 25‒29 年度日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究 C「古・中期インドアーリヤ語韻律の形成と発展」）による研究成果の一部である。

研究に際しては，主として個人で所有するスタンダードな文献（→ 参考文献）に依拠した。本稿完成段階で竹崎隆太郎氏に Prātiśākhya 文献書誌に関する貴重な情報を頂いた。また尾園絢一氏と張本研吾氏にも重要なご指摘を頂いた。諸氏に深く感謝する。

1. Vedic 期および post-Vedic 期における言語と韻律の重層性

音節およびマートラーを検討する前提として，それらの概念が成立した時代の言語と韻律との状況を簡単に確認したい。中期インドアーリャ語 (MIA) は古インドアーリャ語 (OIA) から発展したものである。しかし, 古典サンスクリット (Skt) とパーリ語を含むプラークリット (Pkt) とは単純な新旧関係にない。

ヴェーダ期（B.C. 1200～500 頃) の言語・韻律はおおむね 4 種に分類される：

A) Saṁhitā の Mantra 部分（韻文・散文）；
B) Saṁhitā の非 Mantra 部分（散文：Mantra と行作の説明) および Brāhmaṇa (Br)と古 Upaniṣad (Up) の地の文（散文）；
C) Br および古 Up に現れる会話（散文）；
D) Br および古 Up に現れる非マントラ詩節，すなわち，Śloka ないし Gāthā と総称される世俗的・音楽的性格の強い「詩歌」（動詞 *gā* 「歌う」とともに用いられる；ときに器楽演奏を伴う）。

ヴェーダ語は恐らく Pāṇini の時代（B.C.380 頃)，すなわち Gotama 仏陀の時代までは，まだ生きた言語であったと思われる。この頃，すでに Skt がヴェーダ語から成立していたが，早い段階で，学術的・文学的な文語として人為的に固定され，維持されたと思われる。同時期（Pāṇini および Gotama 仏陀の時代）には，他方，Br や Up の会話から窺えるような日常語から, 初期 MIA が地域や社会階層に応じて発展していた状況が推測される。MIA に属する諸言語も，それぞれ，仏教やジャイナ教などの非バラモン宗教文献や文学作品などにおいて，徐々に固定され，人工語として保持されるに至る。

OIA から MIA への発展において特に注目されるのは，母音/子音などの諸音素が単純化されると同時に,[2] 音節構造も単純化されることである。母音は短長２種のみ, 母音間の子音結合は重音（帯気音を含む）, ないし, 鼻音＋子音のみとなる。音節構造は，１）短母音を持つ開音節，２）長母音を持つ開音節，３）短母音を持つ閉音節の３種に限られる。いわゆる「マートラーの法則」により長母音を持つ閉音節は存在できず，母音が短くなる，あるいは，後続する２子音が単子音になる。この結果，音節（ないし母音）に関し,「軽重」２種の単純な区分が可能となり，また１つの「重」*guru-*（2 mātrā）が２つの「軽」*laghu-*（1 mātrā）と等置され，両者の交替が起こるようになる。

ヴェーダ韻律の特色は音節の数により規定されることにあるが，次第に軽重によるリズムに関心が向けられる。1 詩節は複数（２～６）の pāda「脚」[3] から成る。pāda 末では全ての音節が長く発音され実質的に重音節となるが，それに先行する音節，すなわち pāda 末から２番目の（penultimate）音節の軽重に関して，韻律の種類により特定の傾向が現れる。Nidānasūtra および R̥k-Prātiśākhya は以下のような「penultimate の法則」を述べる：12 音節 pāda (Jagatī)と８音節 pāda (Gāyatrī/Anuṣṭubh) の

---

[2] OIA では母音に短 hrasva，長 dīrgha，延長 pluta (adj., m.), pluti (f.)という 3 種の発音時間があり，また，単母音，二重母音 guṇa（*e* < *a* + *i*，*o* < *a* + *u*），同 vr̥ddhi（*ai* < *ā* + *i* , *au* < *ā* + *u*）の 3 種が区別された。MIA では pluti と vr̥ddhi が消滅し，母音は短（*a, i, u, ĕ, ŏ*）と長（*ā, ī, ū, e, o*）の２種に減少する。また連続する子音は同化されるか，母音挿入により分割される（svarabhakti）。

[3] *pā́da-*は *pā́d-* m.の acc.sg. *pā́d-am* を *pā́da-m* と分解し再解釈して作られた二次的語形（RV+）である。1 詩節は 4 pāda から成ることが多いので，獣とその４足に譬えられたと推測される。詩節を数 pāda に区分することは，息継ぎのための休止から発生したと思われる。なお RV I 164,24c *dvipádā cátuṣpadā* では，*pā́da-* の本来の形である *pā́d-*（弱形 *pad-*´）が用いられている可能性がある (→ 注 **10**)。

場合は軽音節が, 11 音節 pāda (Triṣṭubh)と 10 音節 pāda (Virāj) の場合は重音節が，pāda 末から 2 番目の音節に「特徴的なリズム」(Nidānasūtra ***vṛtti-***, RvPrś ***vṛtta-***) である。[4]

時代とともに, 軽重の組み合わせによる多様なリズムが生み出され, 特定の位置に特定のリズムが現れる現象が進行する。上記 ***vṛtta-*** はそのような軽重リズムを特色とする韻律を表す術語となる。古典サンスクリット韻律では音節の数と軽重がほぼ完全に固定された韻律が支配的となり, Akṣaracchandas, Varṇavṛtta あるいは単に Vṛtta と呼ばれる。

他方，初期 MIA の成立・発展とともに,「マートラーの法則」による音節構造の単純化に平行して，また恐らく *tāla-*「手拍子」や *vīṇā-* 等の楽器演奏, *gāthā*「詩歌」の歌唱などによる音楽的リズムの影響も受けて, マートラー *mā́trā-*「(発音に要する) 時間単位」[5] に基づく韻律が生まれる。マートラーに基づく韻律は，Pkt 韻律として発達する一方で，Skt 韻律にも吸収される。この種の韻律は，Jāti ないし Mātrāvṛtta と総称されるが，マートラー数により規定される Mātrāchandas と，一定数のマートラーから成る *gaṇa-*「群れ」により構成される Gaṇacchandas に 2 大別され, 後者が主流となる。さらに Mātrāsamaka 類が加わり，Pkt 韻律から Apabhraṃśa 韻律において，一層複雑な発展を遂げる。[6]

---

[4] Nidānasūtra I 1,18 *aṣṭākṣara-dvādaśākṣarau laghuvṛttī daśākṣaraikādaśākṣarau guruvṛttī*; RvPrś Ed. T/V XVII 37‒39 ＝ Ed. M CCCXXXVIII 21f. *pādau gāyatra vairājāv aṣṭākṣaradaśākṣarau | ekādaśidvādaśinau vidyāt traiṣṭubhajatgatau* ||21|| *varṣiṣṭhāniṣṭhayor eṣāṃ laghūpottamam akṣaraṃ | gurvevetarayor ṛkṣu tad vṛttaṃ prāhuś chandasāṃ* ||22|| Cf. Weber, Indische Studien VIII p.84, 87‒90（Nidānasūtra I 1,14‒19: “Quantität der Penultima”,“Quantitätsgesetz”; RvPrś XVII 21‒23 上記スートラ)。

[5] 原義は「量」ないし「量を測定する手段」(RV+)，そこから韻律・音韻に関して「発音持続時間を測定する単位」の意味で広く用いられる (→ **5.**) 。

[6] Cf. 筆者「古インド・アーリヤ語における韻律の概観」(2011 年口頭発表)

言語において古典Sktと Pkt諸語（さらにApabhraṃśa諸語）が併存し影響を与え合ったように，音節に基づく韻律とマートラーに基づく韻律も，相互に影響しつつ並行して発達し，文学的技巧としての Skt 韻律学およびPkt 韻律学を生み出したことが注目される。

2. Prātiśākhya 文献の成立年代

ヴェーダの口頭伝承は原文の正確な発音を要求し，各ヴェーダ学派に属する音韻学 Prātiśākhya［Prś］を発達させた。現存する Ṛgveda, Sāmaveda, Atharvaveda, 黒Yajurveda (Taittirīya学派) と白Yajurveda (Vājasaneyin学派) の Prātiśākhya は, 生きた言語としてのヴェーダ語の最後の段階に位置する。生きたヴェーダ語の余韻がまだ残っていたPāṇini文法より遅く，ヴェーダ語が死語となった後に作成された Śikṣā よりは古い年代に属すると考えられる。[7] Pāṇini（B.C.380頃）はGotama仏陀とほぼ同時代であるから, Prātiśākhya 文献はGotama仏陀の没後，初期仏教聖典（および失われたJaina聖典）が成立した時代, およそB.C.4世紀後半から2世紀前半頃までに位置づけられる。初期MIA諸方言が日常語として急速に発展し, 非伝統的な思想・文学の用語として旺盛な生産力を示した時期にあたる。アショーカ王碑文（B.C.3世紀中頃 ; 初期 MIA 諸方言）によりインドで初めて文字が使用された時代でもある (**→ 3.1.**)。

および “A Survey of Old and Middle Indian Metres”（近日公刊予定)。

[7] 上記学派順に Ṛgveda-Prātiśākhya [RvPrś], Ṛk-Tantra-Vyākaraṇa [RkTantra] (Sāmaveda に属する Prś), Taittirīya-Prātiśākhya [TaitPrś], Atharvaveda-Prātiśākhya [AvPrś], Vajasaneyi-Prātiśākhya (または Kātyāyanīya-Prātiśākhya) [VjPrś]。AV には Sūrya Kānta により校訂・翻訳された本来の Atharva-Prātiśākhya の他に，それより新しく Śaunaka 派に属する類書が存在する : 1) Caturādhyāyikā [CaturĀ]（Atharvaveda-Prātiśākhya の題名で Whiteny が出版），2) Caturādhyāyikā の補遺と見なされる短いテキスト（Vishva Bandhu が出版）。年代に関しては, cf. Thieme Kl. Schr. p.749 (= GGA 1958 p.41), Allen p.5, Varma p.20–28,下記注 **8**。

Prātiśākhya の諸テキストの中では AvPrś と他の Prś の相違が顕著である。[8] AvPrś は音節，軽 (*laghu-*) と重 (*guru-*)，マートラーの問題に触れないが，他派の Prś は音節とマートラーについて詳論する。AV Śaunaka 派に属する Caturādhyāyikā (→ 注 **7**) は簡略な，時に独自性の強い解説を与える。「軽重」の規定は RkPrātiś，TaitPrātiś の増補部，CaturĀ に現れる；VājPrś は「軽重」に触れず，「重」*guru-* にあたる現象を「母音が２マートラーを持つ」と説明する (→ **4.3.4.**)。

3. 音節（nt. *akṣára-*）の定義，構造，境界

3.1. 音と音節

祭式で用いられるマントラは「実現力を持つ言葉」（*bráhmaṇ-*）とされる。祭式において発せられた言葉が実現し，祭式が実効性を持つためには，正確な発音による発語が必須条件であり，アクセントを伴う発音が口頭伝承により厳格に保持された。

マントラには韻文も散文も含まれるが，中核はリグヴェーダ・サンヒターやアタルヴァヴェーダ・サンヒターに纏められた韻文詩節にある。これらの韻文を散文から区別するものは，規則的に特定の音節数を繰り返す韻律である。韻律の構成単位は「音節」であり，「母音」を中核とする。数えることのできる「音節」が韻律の基盤であり，不可欠の成立条件である。実際の詩節の朗唱では，韻律を知るために音節を数えることは母音を数えることに等しく，「韻律構成単位」としての音節と母音の境界は曖昧である（→ **3.1.**, **3.2.**, **4**）。リグヴェーダでは「音節」という意味

[8] Sūrya Kānta（AvPrś Intrroduction）によると，1）Saṁhitāpāṭha から Padapāṭha への転換を説明する AvPrś が，Padapāṭha から Saṁhitāpāṭha への転換を説明する他の Prś に先行する (p.24–26); 2) AvPrś は Padapāṭha 成立に直接続き, Pāṇini と Patañjali の間に位置する (p.63–66); 3）俗語として使用されていた MIA の影響が AvPrś と VjPrś に見られる (p.65f.) (→ **5.3.4.B** VjPrś IV 148f.)。

で *akṣára-*「流動しない（もの）」[9]という語が 3 回使用されているが[10], 「音節」という概念が，何よりもまず，「韻律の構成単位」として成立したことを示唆している。さらに音節の「軽重」（→ **4.**）の対比が，韻律に格別の魅力を添え与えたと思われる。韻律は「非日常的」な特殊な技巧であり，マントラに「実現力」***bráhmaṇ-***（この語は「実現力をもつ詩人の言葉」から，その実現力そのものに比重が移って行く）を与える重大な要素の一つであったと推測される。韻律はまた韻文マントラの作成と正確な口頭伝承を助けたと考えられる。文法学，韻律学が後にヴェーダ補助学 (*vedāṅga-*) とされ，また各学派に，正確な発音のための音韻学 Prātiśākhya が発達したことは当然と言えよう。

他方，インドにおける文字使用は，はるかに遅れて，アショーカ碑文（B.C. 3 世紀中葉）に始まる。音節文字 (Brāhmī 文字，Kharoṣṭhī 文字) であり，先行子音（単・重・複合子音）を伴う母音を単位とする。文字と（音韻学上の）音節とは，共に母音を基盤とするが，付随する子音の扱いに関して一致しない。両者はまた，韻律上の「音節（ないし母音）の

---

[9] *akṣára-* は一般に「不滅の（もの）」と訳される。注 **10**，注 **18** 参照。

[10] RV I 164,24　*gāyatréṇa práti mimīte arkám* ¦ *arkéṇa sā́ma tráiṣṭubhena vākám* | *vākéna vākám̥ dvipádā cátuṣpadā-* ¦ *ₐkṣáreṇa mimate saptá vā́ṇīḥ* ‖「Gāyatrī の［行］によって，讃歌の詩句（*arká-*）を彼は計り作る，讃歌の詩句（*arká-*）によって，サーマン（旋律）を，Triṣṭubh の［行］によって，詩節（*vāká-*）を，2 足，4 足の詩節（*vāká-*）によって，詩節（*vāká-*）を。**音節（*akṣára-*）**によって，ひとびとは 7 つの声を計り作る」(cf. Gotō, Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis, 2007, p.299, 302, 740, 744); I 164, 39　*r̥có akṣáre*「讃歌の**音節（*akṣára-*）**において」; X 13,3cd　*akṣáreṇa práti mima etā́m* ¦ *r̥tásya nā́bhāv ádhi sám punāmi* ‖ 「**音節（*akṣára-*）**によって，私はこれを計り作る。天理（*r̥tá-*「ぴったりはまること，規則正しい周期性」）の臍の上で，私はすっかり清める」。詩行は一般に *pā́da-*「足，脚」つまり「1/4」とよばれるが（→ 注 **3**），RV I 164,24c *dvipádā cátuṣpadā* では，*pā́da-* の本来の形である *pā́d-*（弱形 *pad-*´）が用いられていると考えられる。

量」，すなわち「軽重」の規定とも，子音の扱いが異なる。この問題に関しては，**3.3.** 音節構造・音節境界で詳論する。

音と音節とはPrātiśākhya では通常次のように説明される：

音 (*śabda-*)[11] は母音 (m. *svará-/svára-*)[12] と子音 (nt. *vyáñjana-*) に分類される。

母音は3種の高低アクセント (m. *svará-/svára-* → 注12) を持つ: *udātta-*「高」, *anudātta-*「低」, *svarita-*「高くなった後に低くなる」。原則として１単語 (*pada-*) は udātta ないし svarita アクセントを伴う１母音を有する。

子音は「接触音（閉鎖音と対応鼻音）」*sparśa-*,「蒸気音（fricative「摩擦音」）」*ūṣman-* (*h, ś, ṣ, s, ḥ, ẖ, ḫ*)[13],「半母音」*antaḥsthā-/antasthā-* (*y, r, l, v*) に大別される。「接触音」*sparśa-* には計 25 子音が属し，発声位置ににより 5 *varga-* (*ka-varga-, ca-°, ṭa-°, ta-°, pa-°*) に分けられる ; 各 varga の子音は発声方法により 5 種に分類される: 1) 無声非帯気音: *prathama-* = *k, c, ṭ, t, p*; 2) 無声帯気音: *dvitīya-* = *kh, ch, ṭh, th, ph*; 3) 有声非帯気音: *tr̥tīya-* = *g, j, ḍ, d, b*; 4) 有声帯気音: *caturtha-* = *gh, jh, ḍh, dh, bh*; 5) 鼻音: *pañcama-/uttama-* = *ṅ, ñ, ṇ, n, m*. この他に特殊鼻音 *anusvāra-* (*ṃ*)と *anunāsika-* (*ṁ*)[14], *nāsikya-*「子

---

[11] 音の分類に関しては，cf. Altindische Grammatik I; Allen p.79‒93 (TaitPrś I 1, RkTantra I 1‒4, VjPrś VIII 1ff.).

[12] *svará-* (*svára-*) m.は語根 *svar*「音を発する，響く」の派生語であり,「音，声，響き」,「母音」,「(母音の) 高低アクセント」等の多義に用いられる。

[13] TaitPrś I 9 は visarjanīya (*ḥ*) を除く６音とする（竹崎氏の御指摘に感謝する)。

[14] anusvāra と anunāsika は, 母音に後続する鼻音が特定の条件下において変化したものであるが, 本来の発現条件に関しては, cf. Hoffmann Aufsätze zur Indoiranistik II 655 n.1 “*ṁ* Anunāsika: ved. vor *r, ś, ṣ, s, h* (und in Sandhiform *-āṃ* statt *-ān*); *ṃ* Anusvāra: vor *y, v* (nachved. auch *r, ś, ṣ, s, h*) und (als Lesehilfe) statt homorganen Nasals vor Plosiven in Kompositionsfuge und Sandhi.” なお TaitPrś II 30 (→ 注 **59**), XXII 14 (→ **4.3.3.**), CaturĀ I 53 (→ **4.3.5.**, 注 **61**), I 83f. (→ **5.3.5.**, 注 **79**)では， *anunāsika-* が形容詞「鼻孔を通って響く」として用いられ，音

音間に挿入される鼻音化された閉鎖音または *h*」(別名 *yama-*「双生児」→ 注 **20**) などが数えられる。

<u>音節</u> **(nt. *akṣára-*)** は *sandhi-*「連声」により結合され一息で発声される単語群 (*eka-prāṇa-bhāṣya-* TaitPrś V 1; 韻文では yati で区切られる部分) の基本的構成要素であり，「<u>(単独ないし子音等の付属音素を伴う) 母音 (**m. *svará-/svára-***) である</u>」と定義される (→ **3.4.1.A = 4.3.1.A** RvPrś I 14, **3.4.1.B** RvPrś XVIII 17, **3.4.2.** Rktantra 46 [II 5,6], **3.4.4.** VjPrś I 99)。子音は, 音節の胴体である母音に付属する手足 (*aṅga-*) とみなされる (**→ 3.4.1.B** RvPrś I 15; **3.4.3.** TaitPrś XXI 1)。「子音」(nt. *vyáñjana-*)「塗り分ける手段, 色付け, 塗料」は母音の前後に付随し, 母音を様々な色 ***varṇa-***, すなわち「<u>音色, 音質 ; (術語) 音素</u>」[15] に塗り分ける (例 : *a* → *a*, *aṃ*, *aḥ*, *ka*, *da*, *na*, *śa*, *ra*, *taṃ*, *yaḥ* 等)。諸音素が母音という核に固定されて流動性を失い, *akṣára-*「流れ去らない, 流動しない (もの)」 (根 *kṣar*「流れる」の派生語 ; RV+) としての「語の基盤」[16] すなわち「音節」が成立する。

しかし「母音が音節である」という定義から窺えるように, 音節と母音の区別は不明瞭で, Prātiśākhya でも他種文献でも *akṣára-* は「音節」と「母音」の両義で用いられる (→ **3.3.**; **4**)。<u>母音の持つ「他の音素により動かされず, 安定した発音基盤となる」側面が *akṣára-* (nt.) と表現され, 「音節」という概念に発展し, 他方, 母音の「高くあるいは低く響</u>

(m. *kāra-*), 音節 (nt. *akṣara-*), 母音 (m. *svara-*) 等を修飾する。MIA では母音に後続する鼻音は, 子音の前および語末において, 原則としてすべて anusvāra に置換される方向に向う (Pischel § 269)。母音＋ anusvāra が韻律上 *laghu-*「軽」 と解釈される場合, anunāsika「鼻母音」と (近年の研究者により) 呼ばれる習慣である (MIA においては anunāsika を表示する文字記号はない)。anusvāra と anunāsika の関係および成立発展過程については古くから論じられている。Cf. Cardona “Deploments of nasals in early Indo-Aryan: anunāsika and anusvāra”.

15 Cf. Allen p.13−16.

16 Cf. Scharfe Gramm. Lit. p.77 “The unmoving part of the flow (√*kṣar*) of speech”.

く」側面が *svará-/svára-* (m.) と表現されたと推測される。

「音素」*varṇa-* が子音の場合は母音 *a* を伴う音節の形で表示されることから，*akṣára-* はさらに「音素」*varṇa-* の意味でも用いられる。Pāṇini 文法の音素一覧表は，TaitPrś I 1 等では Varṇasamāmnāya, Patañjali の Mahābhāṣya では Akṣarasamāmnāya と呼ばれる。[17] これに対する Bhāṣya の末尾でPatañjali はŚlokavārttika1–2を引用して*akṣara-* の意味を解説し，「消滅しない（*na kṣīyate*）」「流れない (*na kṣarati*)」「到達する (med. *aśnute*)」からの語源説を紹介した後，*akṣara-* は「音素」*varṇa-* を指すという説に従い,「音素一覧表」Akṣarasamāmnāya こそが「実現力を持つ言葉」*brahmaṇ-* の総量であり，本人と両親に果報をもたらすと賞賛する (Mahābhāṣya I 1,2: Pratyāhārāhnika 36,5)。[18]

---

[17] 別名 Pratyāhārasūtrāṇi「*pratyāhāra-*（複数の音素を *ac*, *hal* のような短縮表現によりまとめて）取り出すためのスートラ集」; 後には Śivasūtrāṇi または Māheśvarasūtrāṇi と呼ばれる。

[18] *atha kim idam akṣaram iti* | 《*akṣaraṃ na kṣaraṃ vidyāt* (Ślokavārttika 1a)》 *na kṣīyate na kṣaratīti vākṣaram* || 《*aśnoter vā saro 'kṣaram* / (1b)》 *aśnoter vā punar ayam auṇādikaḥ saranpratyayaḥ* | *aśnuta ity akṣaram* || 《*varṇaṃ vāhuḥ pūrvasūtre* (1c)》 ***atha vā pūrvasūtre varṇasyākṣaram iti saṃjñā kriyate.*** 《*kimartham upadiśyate* || (1d)》 *atha kimartham upadiśyate* || 《*varṇajñānaṃ vāgviṣayo yatra brahma vartate* | *tadartham iṣṭabuddhyarthaṃ laghvarthaṃ copadiśyate* (Ślokavārttika 2)》 || *so 'yam akṣarasamāmnāyo vāksamāmnāyaḥ puṣpitaḥ phalitaś candratārakavat pratimaṇḍito veditavyo brahmarāśiḥ* | *sarvavedapuṇyaphalāvāptiś cāsya jñāne bhavati* | *mātāpitarau ca svarge loke mahīyete* || 【音素一覧表の説明の後で】さて，この (ここで教示された) *akṣara-* とは何か？「*akṣara-* とは,『*kṣara-* (流失･消滅するもの) でない』と知るべきである」(Ślokavārttika 1a)。「消滅しない」(*na kṣīyate*)，あるいは「流失しない」(*na kṣarati*) という意味で *akṣara-* である。「あるいは *aśnoti* の後に -*sara-*［suffix］がついたものが *akṣara-*である」(1b)。あるいは，*aśnoti*（語根 *aś*）に，この，uṇādi に属する *sarañ* という suffix が［用いられている］。「到達する (med. *aśnute*)」という［意味］が，*akṣara-* である。「あるいは，先行する（昔の）sūtra において人々は varṇa「音素」のことを言っている」(1c)。しかしむしろ，先行する

3.2. 文法学, 韻律学, 音韻学における音節規定の相違

Piṅgala の Chandaḥsūtra に始まる韻律学書は，主として音節に基づく韻律を扱うにもかかわらず，音節の定義や音節構造には触れない。また「音節」ないし「母音」の「軽重」は必須重要項目として定義されるにもかかわらず，「軽重」の主体である *akṣara-* nt.「音節」や *svara-* m.「母音」の語が明示されない。後代の韻律書では「軽重」の主体である「韻律構成単位」として「*mātrika-*」(m.) が用いられる (→ **4.2.1.**)。

Pāṇini 文法にも音節に関する規定が無く，母音 *ac-* (m.)と音節の区別が曖昧である。*akṣara-* という術語自体が現れないが，*guru-*「重」と *laghu-*「軽」とを定義する Aṣṭādhyāyī I 4,10–12 では中性名詞 *akṣara-* が含意されている可能性がある (→ **4.1.**)。Patañjali は *varṇa-*「音素」の意味で *akṣara-* を用いる (→ **3.1.** , 注 **18**)。

これに対し, Prātiśākhya は音節 *akṣara-* nt.と母音 *svara-* m.を区別した上で音節を定義し，「(単独ないし子音等の付属音素を伴う) 母音が音節である」という共通認識を示す (→ **3.1.**, **3.4.1.A**, **C**, **3.4.2.**, **3,4,4**)。他方，音節の構造・境界に関しては，学派により相違点がある。Prātiśākhya (およ

（昔の）sūtra においては *varṇa-*「音素」について *akṣara-*という術語が設けられている。「何のために［音素である *akṣara-* は］教示されるのか？」(1d)。次に, 何を目的として［音素である *akṣara-* は］教示されるのか？「そこにおいて実現力を持つ言葉（*brahmaṇ-*）が展開するところの発話領域（発話対象）は, 音素 *varṇa-* の理解である。それ（音素の理解）を目的として,［発話により］意図されていることの理解を目的として，かつまた［理解の］容易さを目的として［*akṣara-* が］教示される」(Ślokavārttika 2)。ここにある, その音素一覧表 *akṣarasamāmnāya-* が発話一覧表 *vāksamāmnāya-* であり, 花開き，実り，月や星のように飾り立てられた，*brahmaṇ-*（実現力を持つ言葉）の総量であると知られるべきである。これ（音素または音素一覧表）を理解すれば，かつは, 全ヴェーダに関する善行の結果の獲得が生じる；かつは, 父母が天界で栄える（*mahīyete*）」（尾園絢一氏に当該テキストの御指摘を感謝する。）

び Śikśā) に特徴的な，子音結合 (*saṃyoga-*) において，子音を重複する現象 (*krama-*)[19] および鼻音化したつなぎ音 (*nāsikya-*) を挿入する現象 (*yama-*) [20] が，音節境界の規定をさらに複雑にしている。これらの現象は当時の発音の実態を反映していると考えられ，OIA から MIA への移行における子音結合の音韻変化（同化作用，svarabhakti 等）に関連している可能性があるが，この問題は別の機会に検討したい。

3.3. 音節の構造と境界

3.3.1. 単子音

1) 母音の前の単子音はその母音と共に発音され，音節を構成する: *pa-ta-ti*.
2) 休止位置にある子音は先行母音の音節に属する: *vāk#*, *pu-ru-ṣaḥ#*, *e-vam#*.

3.3.2. 子音結合

1) 開始位置にある子音結合は後続する母音に属する: *#prā-ṇaḥ*, *#snā-ta-kaḥ*.

2) 母音間で複数の子音が連続する場合には，原則として，最初の子音が先行母音に属してその音節を閉じ，最後の子音が後続母音に属し

---

[19] 文法学, Prātiśākhya, Śikṣā の諸文献により規定が相違する。Prś では一般に, 閉鎖音＋閉鎖音の場合は第 1 子音の重複， *r/l/h/s/ś/ṣ* +閉鎖音の場合は第 2 子音の重複を定める。Cf. Renou s.v. krama, Varma p.99−125 (krama の規定 ; krama と MIA の子音結合同化作用との関係); Allen p.79: 3.125。

[20] 閉鎖音/*h* + 鼻音（*ṅ*, *ñ*, *ṇ*, *n*, *m*）の場合, 鼻音化されたつなぎ音（先行子音と同種の鼻音：*nāsikya-*）が挿入される：TaitPrś XXI 12−14 (→ **3.4.3.**)。なお VjPrś I 103 では yama は「閉鎖音と鼻音との子音結合における先行子音の重複」を意味する (→ **3.4.4.**)。Cf. Renou s.v. nāsikya.

てその音節を開始する。krama と yama を度外視すると，次のようになる：*sap-ta-*, *ag-ni-*, *put-ra-*, *an-na-* 等。このような音節境界は音節文字の構造と一致しない。音節文字（Brāhmī, Devanāgarī など）においては，母音間の子音が（anusvāra/anunāsika と visarjanīya 類を除き）すべて後続母音に付随する（*sa-pta-*, *a-gni-*, *pu-tra-*, *a-nna-*等)。Prś の中で, RvPrś は例外的に, 子音連続全体が後続母音に属する (*sa-pta-* 等) という原則を定め, 代替として他の Prś と共通の音節区分 (*sap-ta-* 等) も認める (→ **3.4.1.**)。RvPrś の規定が音節文字の構造に類似することが注目される。

3) Prś では krama と yama による子音の重複や挿入のため, 3 子音以上の連続が頻繁におこる。中間部の子音は，TaitPrś では後続母音に, VjPrś では先行母音に属する傾向が強い（→ **3.4.3.**, **3.4.4.**）。krama と yama を除くと，3 子音以上の子音結合は頻度が低い。インドアーリャ祖語では閉鎖音の 3 連続は稀である；3 連続子音の 1 つは通常 sonorant であり，隣接する閉鎖音に引き寄せられる。MIA における子音同化作用の場合と同様に，子音の抵抗力（閉鎖音 > 歯擦音 > 鼻音 > 半母音 *l*, *v*, *y*, *r*)[21] に依存すると想定される。

4) TaitPrś によると (→ **3.4.3.**), 第2子音は一般に先行母音に帰属する (XXI 5); しかし, 第 3 子音が半母音で第 2 子音と同音質 (*savarṇa-*) でない場合，および，第 2 子音が閉鎖音・鼻音 (*sparśa-*) で第 3 子音が摩擦音 (*ūṣman-*: sibilant, *h*, *ḥ*, *ẖ* ,*ḫ*) または *nāsikya-* (鼻音化された挿入繋ぎ音；XXXI 12 および 14; → 注 **20**) の場合は，第 2 および第 3 子音はともに後続母音に帰属する (XXI 7–9)。このような分割されない子音結合は，ギリシャ･ラテン韻律学の “muta cum liquida” と比較されうる : 閉鎖音＋流音（ギリシャ語 *m*, *n*, *r*, *l*, ラテン語 *r*, *l*）

---

[21] Cf. Geiger §51.

は強い結合により１子音として扱われ，分割されず，また先行する短母音を韻律的に長（“long by position”）にしないことがある。しかしインドの音声学・韻律学では，上記の子音結合は2子音としての価値を失わず，先行する短母音を韻律的に重（*guru-*）とする（→ **5.**, **5.1.**, **5.2.**, **5.3.**）。

3.3.3. 現代の音韻論では音節構造が母音で終わる開音節（e.g. *ca*, *vā*）と子音で終わる閉音節（e.g. *kim*, *tad*）との2種に区分されるが，古代インドの文法学，音韻学，韻律学にはこの区分法が見られない。

3.4. Prātiśākhya における規定

3.4.1. Ṛgveda-Prātiśākhya[22]

第1章（Saṃjñāparibhāṣāpaṭalam）では先に軽重が規定され，その中で「(長短）両母音たちが音節たちである」と定義される（→ **4.3.1.A**)。それに続き，音節の構造（母音に付属する子音, anusvāra, visarjanīya）と音節境界が規定される。ほぼ同様の規定が第18章（Chandaḥpaṭalam 3）において繰り返され，その直後に軽重の規定が続く（→ **4.3.1.B**)。第1章でも第18章でも「母音が音節である」と明言される（→ RkTantra 46 [II 5,6], VājPrś）。両章ともに，子音結合における音節区分が他の Prś とは異なる：音節文字表記と同様の境界を原則とし（I 15b; XVIII 17), 他の Prś と共通する音節境界を任意選択とする（I 15d; XVIII 18cd) (→ **3.3.2.2**)。

A) 第1章 14 (M 18–22; T/V 17–21)［Triṣṭubh］(= **4.3.1.A**; → **3.1.**, **3.4.1**.**B**, **3.4.2.**, **3.4.4.**)

ojā ***hrasvāḥ*** *saptamāṃtāḥ* ***svarāṇām*** (18) | *anye* ***dīrghā*** (19) *ubhe* t_u*v* ***akṣarāṇi*** (20) |

---

22 版によりスートラの区分・番号が異なる：Max Müller (M), Tripāthī (T), Verma (V)。本稿では M の表示に従う。

gurūṇi dīrghāṇi (21) *tathetareṣāṃ* | ***saṃyogānusvāraparāṇi*** *yāni* (22) ‖14 ‖

18. 母音 (*svara-* m.) たちの中で，7 番目を最後とする奇数［母音］たち（*a*, *ṛ*, *i*, *u*）が短い（m. pl.）。19. 他の［母音］たち（*ā*, *ṝ*, *ī*, *ū*, *e*, *o*, *ai*, *au*）は長い（m.pl.）。20. しかし<u>両方の［母音たち］</u>**(pl. m. *ubhe*** : <u>長母音たちと短母音たち</u>**)** <u>が音節たち</u> **(pl. nt. *akṣara-*)** <u>である</u>。21. 長い［母音 *svara-* m. から成る音節たち: pl.nt. *akṣara-*］は重い（pl.nt.）。22. 別様の（短い母音から成る）［音節たち］の中，結合子音または anusvāra を後に持つ［音節たち］(pl. nt.）は同様である（重い）。

B) 第 1 章 15 (M 23‒27; T/V 22‒26)［Triṣṭubh］
anusvāro vyaṃjanam cākṣarāṃgaṃ (23) | ***svarāṃtare vyaṃjanāny uttarasya*** (24) |
pūrvasyānusvāravisarjanīyau (25) | ***saṃyogādir vā*** (26) ***ca parakrame dve*** (27) ‖15‖

23. anusvāra と子音とは音節の付属物(肢: *aṃga*-)である (→ **3.4.3.** Tait-Prś XXI 1)。24. <u>母音間では諸子音 (**pl.**) は後続する［母音］に属する。</u> 25. anusvāra と visarjanīya とは先行する (母音) に属する。26. 任意に，子音結合 (*saṃyoga-*) の最初の子音は［先行母音に属しても良い］。[23]
27. また, (子音結合の) 後半子音が重複される場合 (*parakrame*), 2［子音］が［任意に先行母音に属しても良い］。[24]

C) 第 18 章 17‒18 (M1033‒1038; T/V 32‒36)［Śloka］
savyaṃjanaḥ sānusvāraḥ | *śuddho vāpi* ***svaro 'kśaraṃ*** (1033) |
vyāñjanāny uttarasyaiva | *svarasyā-* (1034) *antyaṃ tu pūrvabhāk* (1035) ‖17‖

---

[23] Cf. Uvaṭa 註: RV VIII 68,1 *ā́ tvā rátham* → *ā́ttvārátham* = *ā́t-tvā-rá-tham* / *ā́tt-vā-rá-tham* (krama を除くと *ā́-tvā-* / *ā́t-vā-*); RV I 1,1 *agním īḷe* → *aggnímīḷe* = *ag-gní-mī-ḷe* / *agg-ní-mī-ḷe* (*a-gní-* / *ag-ní-*)。

[24] Cf. Uvaṭa 註: RV VI 75,4 *ā́rtnī* → *ā́rttnī* = *ā́r-ttnī* / *ā́rtt-nī* (*ā́-rtnī* / *ā́r-tnī* / *ā́rt-nī*); RV I 162,17 *pārṣṣṇyā́* → *pār-ṣṣnyā́* / *pārṣṣ-ṇyā́* (*pā-rṣṇyā́* / *pār-ṣṇyā́* / *pārṣ-ṇyā́*). Cf. Altindische Grammatik I p.278:§240 b; Cardona, Fs. Kumamoto p.66‒68: 9.2.3.

1033. 子音を伴う，anusvāra を伴う，あるいはまた純粋な（何も伴わない）母音が音節である。1034. **諸子音（pl.）**は後続する母音にのみ **(*eva*)** 属する。1035. しかし［連続して発音される音素群の］末尾に位置する子音は先行する［母音］に属する。

visarjanīyānusvārau | *bhajete pūrvam akṣaraṃ* (1036) |
saṃyogādiś ca vai- (1037) *evaṃ ca* | *sahakramyaḥ parakrame* (1038) ‖18‖

1036. visarjanīya と anusvāra は先行する音節を分け前として持つ（先行音節に属する）。1037. 子音結合の最初もまた任意に［先行音節に属しても良い］。[25] 1038. ［子音結合の］後半子音が重複される場合 (*parakrame*), 重複子音を伴う［子音結合の最初］もまた同様に［任意に先行音節に属しても良い］(1038)。[26]

3.4.2. Ṛktantra

母音の発音時間の規定 40–45 (→ **4.3.2.**) に続き, 母音が *akṣara-*「音節」であると定義される (46–48)。この順序は RvPrś 第 1 章と類似する。これとは独立して，子音の母音への所属関係，すなわち音節構造と音節区分が考察される (20–26)。

［音節の定義］

46. (II 5,6.) *akṣaram.*

［40–45 (→ **5.3.2.**) で述べた諸音，すなわち，母音 (*svara-* m.) が］音節である (→ **3.1., 3.4.1.A/B, 4.3.1.A, 3.4.4.**)。[27]

---

[25] M 1037 *saṃyogādiś ca vā*. T/V 35 *saṃyogādiś ca vaivam ca*. M のスートラ区分に従う。

[26] Cf. Uvaṭa 註: [*arkaḥ*] *arkkaḥ* = *a-rkkaḥ*, *ar-kkaḥ*, *ark-kaḥ*; [*ūrjam*] *ūrjjam* = *ū-rjjam*, *ūr-jjam*, *ūrj-jam*.

[27] Comm. (Ṛktantravivṛti): *akṣarasaṃjñam bhavati* | *akārakālo dvirakārakālo*

47. (II 5,7) *vārtti*.
(先行子音と母音の) 結合（*varta*-[28]）をもつもの (*vārtin*- n.sg.) は［音節である］。[29]

48. (II 5,8) *bhūyān*.
より豊富な（より多くの要素と結合した）［母音 (*svara*- m.) は 音節である］。[30]

［音節構造・音節区分］

20. (II 2,10). *vyañjanaṃ pūrvasyāntasvaram.*
(休止位置にある)[31] 子音は先行するものの最終母音を持つ（〜に属する）。

21. (II 3,1) *abhinidhānaḥ*.
(子音重複 *krama*- により) 付置された音[32] も［先行最終母音に属する］。

22 (II 3,2) *vyañjane*.

---

vr̥ddha ity adhikāraḥ | …「［母音が］*akṣara* という術語を持つもの（nt. sg.）となる。*a* 音の発音時間を持つ［母音］, 2 つの *a* 音の発音時間を持つ［母音］, vr̥ddha である［母音］という補足がある。」

28 文法学では通例「複合語」を意味する。ここでは子音と母音の結合を指すと考えられる。

29 Comm.: *akārādiṣu vartate vyañjanaṃ varti cāpy aksaraṃ bhavati* ‖.

30 Comm.: *bhūyāṃś ca savyañjano varttitvenākṣaraṃ bhavati* | *kāruṃ bibhrat* (1,456). *agnim dūtam* (1,3).

31 Comm. : ***avasitam ity adhikāraḥ*** | *yad indra* ***prāk*** (SV I 276) … 註引用の *Sāmaveda* 番号は Ed. Sūrya Kānta の表示に従う。

32 Comm.: *kramajaṃ ca purvāntasvaraṃ bhavati* | *arkkam* (I 15). *naryyam* (I 56). *pūrvyyam* (I 98).

子音の前で［子音は先行最終母音に属する］。[33]

23 (II 3,3) *anusvārau ca*.
２種の anusvāra (短母音ないし長母音の後の anusvāra) もまた［先行最終母音に属する］。[34]

24. (II 3,4) *relāv avyaparau*.
v または *y* により後続されない *r* と *l* も［先行最終母音に属する］。[35]

25. (II 3,5) *sparśaḥ sve*.
接触音（閉鎖音および鼻音）は自身に属する［音］*sva-* (接触音)[36]の前においては［先行最終母音に属する］。 例 : *ag-ne*, *an-dha-saḥ*, *in-drā*°.

26. (II 3,6) *rādi ram* (= *parādi svaram*)[37] *anyat*.
(上記 sūtra 20–25 と) 異なる子音は後続する最初の母音を持つ (〜に属

---

[33] Comm. e.g. *yas te* (I 470). *yaḥ pātram* (I 424). *yad bhūmim* (I 121). *panyam* (I 123). *taṃ vaḥ* (I 126).

[34] Comm. : e.g. *triṃśatpadā* (I 281). *aṃsatram* (I 275). *triṃśāddhāma* (II 126). *apāṃ retāṃsi* (I 27). *vyāṃsam* (I 28). *hrasvād dirgho dīrghād hrasvaḥ* ‖ 注釈の最後に **anusvāra** の音長が規定される :「短(母音)の後では長い。長母音の後では短い。」Cf. VjPrś IV 148f. (→ **5.3.4.**).

[35] Comm.: *spardhante* (I 539). *kārghā* (I 105). *śulkā* (I 291). *galdayā* (I 307).

[36] Sūrya Kānta は *sve* を *hrasve* の略語と解する，cf. R̥ktantram Introduction p.36 *sva* = *hrasva* (25, 150)。他方 RkTantra 155 (IV 2,5) *sve* は *svare* の略語である（Sūrya Kānta loc. cit.には欠く）。*sve* = *hrasve* も *sve* = *svare* も当該スートラの文脈に合わない。Renou Terminologie p.533 s.v. sva “au sens de svavargīya” (RkTantra 25 その他) の解釈が適切と思われる。Comm.: *sparśah sve pratyaye pūrvāntasasvaro bhavati* | *sakhyaṃ te* (1,324). *agne* (1,1). *na jyāyaḥ* (1,203). *araṇyoḥ* (1,79). *andhasaḥ* (1,313). *indrā*◦ (1,388). 註釈の引用例の中, *sakhyaṃ*, *jyāyaḥ*, *araṇyoḥ* は接触音＋接触音ではなく接触音＋半母音である。

[37] Comm. *parādi* (v.l. *padādi*◦) *svaram anyad ataḥ.*

する)。

3.4.3. Taittirīya-Prātiśākhya XXI 1–16

krama による重複, yama による挿入鼻音 (nāsikya), svarabhakti 等を考慮して音節の構成・区分を詳しく定める。子音結合の最後は後続母音に,最初は先行母音に，それ以外は先行母音に属するという原則を示す。例外として,（半母音以外の）子音＋半母音（*y*, *r*, *l*, *v*）, sparśa（閉鎖音・鼻音）＋ūṣman（*h*, *ś*, *ṣ*, *s*, *ẖ*, *ḫ*）の結合は, 分割されずに全体として後続する母音に属する。この現象はギリシア・ラテンの muta cum liquida の法則を想起させるが, 2 子音としての音韻価値を保持する (**→ 3.3.2.4**)。

1. *vyañjanaṁ svarāṅgam*.
子音は母音（という胴体）の肢（付属物 *aṅga-*）である(→ **3.4.1.** RvPrś I 15)。

2. *tat parasvaram*.
それ (子音) は後続する母音を持つ (後続母音に属する)。

3. *avasitaṃ pūrvasya*.
休止した［子音］は先行する［母音］に属する。

4. *saṃyogādi*.
結合した［子音］の最初［の子音］は［先行母音に属する］。

5. *pareṇa cāsaṁhitam*.
後続［母音］と結合していない［子音］もまた［先行母音に属する］。
【3 子音以上連続の場合, 最後の子音のみが後続母音に属し，残りの子音はすべて先行母音に属する；例外が 7～9 に列挙される。】

6. *anusvāraḥ svarabhaktiś ca*.
anusvāra と svarabhakti (子音結合分割母音) もまた［先行母音に属する］。

7. *nāntasthāparam asavarṇam.*

半母音（*antasthā-*: *y, r, l, v*）により後続され，同類音（*savarṇa-*; この場合は，半母音）でない［子音］は［先行母音に属さ］ない。[38]

8. *nāsikyāḥ.*

nāskya (後述 12-14 による挿入鼻音) たちも［先行母音に属さない］。[39]

9. *sparśaś coṣmapara ūṣmā cet paraś ca.*

ūṣman（*h, ś, ṣ, s, ẖ, ḫ*）により後続される接触音（*sparśa-*: 閉鎖音+鼻音）もまた［先行母音に属さない］，もし後続する ūṣman もまた［先行母音に属さない］ならば。[40]

10. *svaritāt saṁhitāyām anudāttānāṃ pracaya udāttaśrutiḥ.*

saṁhitā においては，svarita アクセントを持つ音節の後で、anudātta アクセントを持つ音節たちの集積は udātta のように聞こえる。[41]

11. *nodāttasvaritaparaḥ.*

udātta ないし svarita が後続する場合は［そうで］ない。

12. *sparśād anuttamād uttamaparād anupūrvyān nāsikyāḥ.*

鼻音 (*uttama-*: sparśa の varga 最終音 *ṅ, ñ, ṇ, n, m*) により後続される，鼻

---

[38] Ed. Sharma. Mahiṣeya 註: *iṣe tvorje tvā* (TS 1,1,1), *devayajanam adhyavasāya* (6,1,5), *agniḥ sarvā devatāḥ* (2,2,9). 即ち *iṣe-**tvor-j**e-**tv**ā*, *-ma-**dhy**a-va-sā-ya*; しかし半母音 *rv* の連続では *r* は先行母音に属する *ag-niḥ-**sar-vā**-de-va-tāḥ*. Cf. Whitney 注（p.379–382）：この規定は他の Prś に見られない。　。

[39] Comm.: *rukmam upadadhāti* (5,2,7), *kṣatreṇa rājño samanamat* (7,5,23). Sūtra 12 により nāsikya 挿入: *rukmam → rukṅmam = ru**k-ṅm**am*, *rājño → rājñño = rā**j-ññ**o*.

[40] 接触音（閉鎖音・鼻音）と ūṣman の全体が後続母音に属する。Comm.: *yat sauryo bhavati* (出典不明), 即ち *ya-**ts**aur-yo-bha-va-ti.*

[41] Cf. Whitney p.386 note.

音 (*uttama-*) でない sparśa (すなわち閉鎖音) の後で，先行する音（すなわち閉鎖音）に従い (*anupūrvyāt* abl.)[42], nāsikya (鼻音［化した閉鎖音］) (→ **2.1.**, 注 **20**)たちが［挿入される]。[43]

13. *tad yamān eke*.

それをある者たちは yama「双生児」たちと［言っている］。

14. *hakārān na-ṇa-ma-parān nāsikyam*.

n, *ṇ*, *m* に後続される *h* 音たちの後に nāsikya (鼻音［化した *h* 音］) (→ **2.1.**, 注 **20**) が［挿入される]。[44]

15. *rephoṣmasaṃyoge rephasvarabhaktiḥ*.

r と ūṣman（*h*, *ś*, *ṣ*, *s*, *ẖ*, *ḫ*）との結合では, *r* の svarabhakti が [起こる]。[45]

16 *na krame prathamapare*.

無声非帯気閉鎖音（*prathama-* → **3.1.**）により後続される場合，krama の場合には［起こら］ない。[46]

---

[42] Ed. Whitney p.389 notes “***anupūrvyāt*** ‘in their order’ is ambiguous”. Comm.: *anapūrvyeṇa* instr. nāsikya に関しては cf. Renou s.v.

[43] Comm.: e.g. *sa pra**tn**avat* (1,1,2), *granthiṃ gra**śn**īyāt* (6,2,9), *vi**dm**ā te agne* (4,2,2), *yadvadhnā madhumiśreṇa* (5,2,8). 註の諸例が次のように変化する**:** *pra**tnn**avat, gra**śṅn**īyāt, vi**dnm**ā, yadva**dhnn**ā.*

[44] Comm.: e.g. *ahnāṃ ketuḥ* (2,4,14), *aparāhṇe* (2,1,2), *brahmavādinaḥ* (1,7,1 et al.). 註の諸例が次のように変化する: ***ahnn**ām*, *aparā**hṇṇ**e*, *bra**hmm**a-*. Cf. Mi.における子音結合変化の過程：ai. *brāhmaṇa-* (= pa.) > pra. *bamhaṇa-/baṃbhaṇa-/māhaṇa-*; Aśoka 碑文 Girnār *brāhmaṇa-/brahmaṇa-*, *bāhmaṇa-/bahmaṇa-*, Kālsī *baṃbhaṇa-*, Mānsehrā ***bamaṇa-***, Shahbāzgarhī ***bramaṇa-***.

[45] Comm.: e.g. *da**rś**apūrṇamāsau yajate* (2,5,4). *maṇḍūkena vi va**rṣ**ati* (5,4,4), *ba**rs**an nahyaty aprasraṁśāya* (2,5,7). 例えば **da**r̥ś**a-* > **da**riś**a-*, **va**r̥ṣ**ati* > **variṣati*, **ba**r̥s**an* > **barisan.*

[46] krama の意味に関しては，cf. Ed. Whitney p.393f.

3.4.4. Vājasaneyi-Prātiśākhya I 99–106

母音間の連続子音が先行音節に属する傾向が TaitPrś よりさらに強い: TaitPrātiś XXI 7–9 ≠ VjPrātiś I 103–105。I 103 における yama は，Uvaṭa Bhāṣya の例では「子音結合（閉鎖音＋鼻音）おける先行子音の重複」を意味し, TaitPrś XXI 13「先行子音に対応する鼻音 (= *nāsikya-*) の挿入」(→ **3.4.3.**, 注 **20**, 注 **43**, 注 **44**）と異なる。

99. ***svaro 'kṣaram***.
<u>母音が音節である</u> (→ **3.1., 3.4.1.A/B , 4.3.1.A , 3.4.2., 3.4.5.**)。

100. *sahādyair vyañjanaiḥ*.
冒頭に位置する諸子音を伴う母音［も音節である］。

101. *uttaraiś cāvasitaiḥ*.
また休止位置にある後続［諸子音］を伴う［母音も音節である］。

102. *saṃyogādiḥ pūrvasya*.
子音結合の初めの子音は先行［母音］に属する。[47]

103. *yamaś ca*.
yama (鼻音の前で重複された子音) もまた［先行母音に属する］。[48]

104. *kramajam ca*.
krama (子音結合における後の子音の重複) により生じた［子音］もま

---

[47] Uvaṭa : *aś-śvaḥ*. Jyotsnāvṛtti: *iṣét-tvā*.

[48] Uvaṭa: *yathā rukkmam* (VS 15,25) | *kakāradvayamakārāḥ saṃyogo* | *tatra kakārayamau pūrvasya makāra uttarasya* ‖ 「例えば *rukkmam* (VS 15,25) のように。*k* 音の重複と *m* 音と (3 音: pl.) が子音結合である。その場合，双子である 2 つの *k* 音が先行［母音］に属し，*m* 音が後続［母音］に［属する］。」

た［先行母音に属する］。[49]

105. *tasmāc cottaraṃ sparśe*.
その［krama により生じた音の］後に続く［子音］もまた［先行母音に属する］，sparśa (閉鎖音および鼻音) の前にあるならば。[50]

106. *avasitaṃ ca*.
休止位置にある子音もまた［先行母音に属する］。

3.4.5. Caturādhyāyikā I 55–58, 93

55. *parasya svarasya vyañjanāni*.
諸子音は後続する母音に属する。

56. *saṃyogādi pūrvasya*.
子音結合の最初［の子音］は先行する［母音］に属する。

57. *padyaṃ ca*.
語末（*padya-*）［子音］もまた［先行母音に属する］。

58. *repha-ha-kāra-kramajaṃ ca*.
r 音または *h* 音［に後続する子音］の krama (重複) から生じた［子音もまた先行母音に属する］。[51]

---

[49] Uvaṭa: *pārś-śvam* (VS 15,4), *varṣ-ṣyāya* (VS 16,38); Jyotsnā: *bāhv-vóḥ*. (*ark-ka*; cf. RkPrś I 15d = XVIII 18d)。

[50] Uvaṭa (= Anantabhaṭṭa): *pārṣ**ṇ-ṇ**yā* (VS 25,40) ≠ Jyotisnāvr̥tti *pā́r**ṣṣ-ṇ**yā* (VS 25,40). スートラは krama による 2 重子音の後に sparśa (閉鎖音・鼻音) が続く場合を規定するが, Uvaṭa の例は sparśa の前の子音ではなく sparśa 自身が krama を起こすので不適切である。Jyotsnāvr̥tti の例が適切と思われる。

[51] *ark-kaḥ*, *brahm-maṃ*; cf. RkPrś I 15d (**3.4.1.B**) = XVIII 18d (**3.4.1.C**) ; VsPrś I 104 (**3.4.4.**).

93. svaro ’kṣaram.

母音が音節である（→ **3.1., 3.4.1.A/B, 4.3.1.A, 3.4.2., 3.4.4.**）。

4. 「軽」*laghu-* (adj./nt./m.) と 「重」*guru-* (adj./nt./m.)

ヴェーダ韻律は音節から構成される。諸々の韻律を区別する指標は，元来，音節の数と休止位置，言い換えると，pāda の数と各 pāda の保有する音節数であった。音節は母音とそれに付随する諸要素（子音など）の集合体である。韻律を同定するために，構成単位としての音節を数えることは，実質的には，母音を数えることに他ならない。詩節を朗唱する度に音節が変動増減しては韻律が成り立たない。それ故に，発声朗唱の条件に関わりなく「流動しないもの」*akṣára-* (nt.) が音節とされる（→ **3.1.**）。子音などの付随要素は流動的であり，「流動しないもの」は音節の中核である母音だけであるから，***akṣára-* (nt.)「流動しないもの」**は，**「音節」**を意味する述語であると同時に，韻律を作成・使用する現場においては，事実上「**（韻律構成単位としての）母音**」を指すことになる。[52] 恐らくこの曖昧さを解消するために，後代の韻律書では ***akṣára-* (nt.)「音節」**ではなく ***mātrika-* (m.)** が**「韻律構成単位」**として用いられる (→ **4.2.2., 4.2.3.**)

ところで，母音自身の長短や付随する子音等により，1 つの *akṣára-*「音節」，ないし「（韻律構成単位としての）母音」の発音に要する時間量が相違することは古い段階から気付かれていたようである。音節（ないし母音）を *laghu-*「軽い (もの nt./m.)」あるいは *guru-*「重い (もの nt./m.)」の 2 種に大別することは，既に Pāṇini に規定され，当時，広く普及していたと思われる。*laghu-* と *guru-* とは文法学・音韻学では中性で用いられ

[52] たとえば Nidānasūtra I 1, 15−17 では，*akṣara-* が，母音の長さを表す形容詞 *hrasva-*「短い」，*dīrga-*「長い」を伴う（cf. Webwer IS VIII p.84, p.87f.）。Rktantra 43f. も同様である (→ **5.3.2.**) 。

akṣara- に対応するが (→ **4.1.**, **4.3.**), 韻律学では男性で用いられる (→ **4.2.**)。なお、VjPrś では *guru-* に対応する条件下で, *svara-*「母音」が 2 mātrā 持つと規定する(→ **4.3.4**)。「軽」「重」の規定の特徴は，長母音よりも発音時間が長い延長母音（f. *pluti-*, adj. *pluta-*）や vr̥ddhi 母音，あるいは，母音に後続する子音結合の子音数が 3 以上の場合などを特別視せず，すべて「重」に包含することである。韻律における「軽重」の規定は，音韻学における音節の構造・境界（→ **3.**）および諸音素の発音時間（マートラー →**5.**）の規定と関連せず，齟齬が見られる。

韻律では「軽」「重」という対比だけが重要であり，それをさらに細分化することはなかった（音韻学では，例外的に RvPrś で「より重い」「重い」「より軽い」「軽い」という 4 種の音節に区分される →**4.3.1.**)。「発音に要する時間」という観点からは，「重」は「軽」の 2 倍である，すなわち「軽」は 1 mātrā,「重」は 2 mātrā とされる (→ **4.3.4.**, **5.2.**)。「軽」「重」という単純化された対比の背景には，中期インドアーリヤ語における音韻変化（いわゆる「マートラーの法則」）が存在した可能性があり，当時の日常語がすでに MIA の段階にあったことを推測させる（→ **1.**, **5.3.4.B**, 注 **8**, 注 **34**, **6.**)。ヴェーダ期を通じて，軽重の音節の組み合わせにより多様なリズムが生み出され，特定のリズムが特定の場所に固定されることにより，ヴェーダ韻律から叙事詩や古典サンスクリットの韻律が発展する。

4.1. 文法学

Pāṇini Aṣṭādhyāyī (B.C.380 頃) では<u>中性名詞 ***laghu-***「軽」と ***guru-***「重」</u>が韻律上の「軽重」と同じ意味で, それぞれ複数回使用されている。I 4,10−12 に定義が見られる：

10. *hrasvaṃ laghu.*
短い［母音から成るもの］ (音節 *akṣara-*) (nt. sg.) は軽い。

11. *saṃyoge guru*.

［短い母音から成るもの］ (音節 *akṣara-*) は子音結合の前で重い。[53]

12. *dīrghaṃ ca*.

長い［母音から成るもの］ (音節 *akṣara-*) もまた［重い］。

Pāṇini 文法では母音は男性名詞 *ac-* と表現され，短母音，長母音，延長母音は男性形で現れる: nom.sg. *hrasvaḥ*, *dīrghaḥ*, *plutaḥ* (→ **5.1.**: Aṣṭādhyāyī I 2,27f.). 上記スートラにおける中性形 nom.sg. ***hrasvaṃ*, *dīrghaṃ*, *laghu*, *guru*** は,「母音」*ac-* m.ではなく「音節」*akṣara-* nt. に対する形容詞に由来する中性名詞と理解される (→ **3.2.**)[54]。***akṣara-*** の語そのものは **Pāṇini** 文法に現れず，何らかの理由により使用が回避されている。

4.2. 韻律学

4.2.1. B.C. 1~2 世紀頃の成立と推測される Piṅgala の Chandaḥsūtra では Pāṇini より詳しい規定が第 1 章（Weber 第 2 章）に見られる。*l* (*la*) = *laghu-*「軽」，*g* (*ga*) = *guru-*「重」という術語が男性名詞として用いられる。「軽い」ないし「重い」主体が何か明示されないが，男性形であるから中性名詞 *akṣara-*「音節」は排除される。「文末にある」「子音結合により後続される」「*he*」という文脈から，男性名詞 *svara-*「母音」m. を指すと推測される。さらに **1 guru = 2 laghu** という原則が示される。

A) I 9–13 = Weber 1, 21–25 (II 9–13: p.219)

9. *gr̥ l*.

---

[53] Cf. ギリシア･ラテン韻律の "long by position"「子音結合の前の短母音が（連続子音の前という）位置により長い」。

[54] Böhtlingk 訳は母音とする。

gr［のような音 (母音 m.)］は軽い (m. → 13. *lau*)。

10. *g ante.*
［それは］(pāda) 末においては重い (m. → 13. *sa*)。

11. *dhrādiparaḥ.*
dhr（等の子音結合）を後続に持つ (母音 m. は)［重い］。

12. *he.*
he のような［母音は重い］。

13. *lau saḥ.*
それは **(重い母音は m.sg.)**[55] **2** つの軽［い母音］**(m. du.)** である（に等しい）。

B) Halāyudha 註冒頭　= Weber 1,7‒8 (Sūtra I 4: p.211)[56] [Āryā]

dīrghaṃ saṃyogaparaṃ tathā plutaṃ vyañjanāntam ūṣmāṇam (v.l. *ūṣmāntam*) |
sānusvāraṃ ca guruṃ kvacid avasāne 'pi laghvantyam ‖4‖

長い（母音），子音結合を後に持つ（母音），同様に延長された（母音），子音を最後に持つ（母音），摩擦音（蒸気音 *ūṣman*- m.: sibilant, visarjanīya 等）を最後に持つ（母音），そして anusvāra を伴う（母音），［これらを］重い（母音）であると，また，どこであれ休止位置（*avasāna*-）

---

[55] Halāyudha 註: *sa gakāro dvimātrāḥ. gaṇanāyāṃ dvau lakāro kṛtvā gaṇayitavyaḥ.*

[56] Weber p.209 は Piṅgala Chandḥsūtra に属する二次的成立の Paribhāṣya であるとする。Ed. Kedaranātha, Ed. Siṃharāya, Ed. Jīvānandavidyāsāgara では Halāyudha 註の冒頭に置かれる。Ed. Biliotheca Indica では Halāyudha に対する脚注に現れる。

では，たとえ軽い終結を持つ（母音）でも［重いと理解すべきである（先行スートラ 3. *vijānīyāt*）］。

4.2.2.　紀元後 6〜9 世紀頃に位置づけられる Jayadevacchandaḥ では，音節に基づく韻律の構成単位として，*akṣára-*「音節」(*nt.*)でも *svara-*「母音」(m.)でもなく，***mātrika-* (m.)** を用い，その軽重を規定する (I 3−7)。**「重い」*mātrika-* は 2 mātrā と等置される。**

3. *mātriko l ṛjuḥ.*
mātrika- (m.)「韻律測定単位」は，軽く，直線記号（|）である（表記される）。

4. *vānte g vakraḥ.*
あるいは重く，曲線記号（S）である（表記される）。

5. *saṃyogādiparaḥ.*
子音結合等を後続として持つ［*mātrika-*］は［重い］。

6. *dīrghaplutau ca.*
長い［母音］と延長された［母音］もまた［重い］。

7. *dvimātro 'sau.*
これ (重い *mātrika-* m.) は 2 mātrā を持つ。

4.2.3. 紀元後 11 世紀頃の成立と推測される Kedārabhaṭṭa の Vr̥ttaratnākara も，音節に基づく韻律の構成単位として ***mātrika-*** (m.) を用い，その軽重を規定する。

Kedārabhaṭṭa Vr̥ttaratnākara I 9　［Śloka］
sānusvāro visargānto ¦ *dīrgho yuktaparaś ca yaḥ* |
vā pādānte tv asau g vakro ¦ *jñeyo 'nyo* ***mātriko*** *l ṛjuḥ* ‖

anusvāra を伴う，visarga を最後に持つ，長い（母音から成る），また，結合した（子音）を後に持つ場合，あるいは pāda 末にある場合，これ（韻律構成単位 m. *mātrika-*）は重く，曲線記号である。他の韻律構成単位（m. *mātrika-*）は軽く，直線記号と理解されるべきである。

4.3. Prātiśākhya

音節の軽重に関する規定は RvPrś 第 1 章と第 18 章，RkTantra，TaitPrś 第 22 章の末尾 2 詩節（14–15）および CaturĀ に現れる。いずれの場合も，母音の長さに関して，pluta/pluti への言及を欠くことが注目される。

韻文である *ṛ́c-* を対象とする RvPrś が，韻律上，重要な役割を果たす「音節の軽重」を考察するのは当然と考えられる。大部分が韻文であるアタルヴァヴェーダを扱う CaturĀ も同様であろう。*sā́man-*を対象とする RkTntra の軽重規定は短く不完全である。ヤジュルヴェーダでも *ṛ́c-* 等をマントラとして用いるので，「音節の軽重」を論じる必要があったと思われるが，TaitPrś 第 22 章 14–15 の記述は二次的な補遺の可能性が高く，特に最後の 15 は最も新しい段階に属すると考えられる。

白ヤジュルヴェーダ学派に属する VjPrś は「軽重」には直接触れず，guru に相当する条件下で「母音が 2 マートラーを持つ」と表現する。「軽重」の規定が既に普及しており，言及の必要が無くなっていたが，「guru ＝ 2 マートラー」という理論はまだ新しく，述べる必要があったのではないかと推測される。

4.3.1. Ṛgveda-Prātiśākhya I 14, XVIII 19–20

RvPrś では第 1 章において，母音の長短の規定と音節の軽重の規定に挟まれる形で，「母音が音節である」という音節の定義が現れる (→ **3.4.1.A**)。第 18 章では音節の構造・境界の規定（→ **3.4.1.B**）に続き，軽重が扱われる。guru と laghu に加えて，garīyas「より重い」と laghīyas「より軽い」音節が規定される。韻律上の概念である guru と laghu とが，音

韻論の立場からより厳密に理論化されている。

A) 第 1 章 14 (M 18–22; T/V 17–21)［Triṣṭubh］(→ **3.4.1.A**)

ojā ***hrasvāḥ*** *saptamāṃtāḥ* ***svarāṇām***[18] | *anye* ***dīrghā***[19] *ubhe* t_u*v* ***akṣarāṇi***[20] |
gurūṇi dīrghāṇi[21] *tathetareṣāṃ* | ***saṃyogānusvāraparāṇi*** *yāni*[22] ‖14‖

18. 母音 (*svara-* m.) たちの中で，7 を最後とする奇数［母音 *svara-*］たち（*a*, *ṛ*, *i*, *u*）が短い（m. pl.）。19. 他の母音 (*svara-* m.) たち（*ā*, *ṝ*, *ī*, *ū*, *e*, *o*, *ai*, *au*）は長い（m.pl.）。20. しかし両方の［母音たち］**(pl. m. *ubhe* :** 長母音たちと短母音たち**)** が音節たち **(pl. nt. *akṣara-*)** である。21. 長い［母音 *svara-* m. から成る音節たち: pl.nt. *akṣara-*］は重い（pl.nt.）。22. 別様の (短い母音から成る)[音節たち]の中，結合子音または anusvāra を後に持つ［音節たち］(pl. nt.）は同様である（重い）。

B) 第 18 章 19 (M 1039–1042; T/V 37–40) – 20 (M 1043–1046; T/V 41–44)［Śloka］

gurv ***akṣaraṃ***[1039] *laghu hrasvam* | *na cet saṃyoga uttaraḥ*[1040] |
anusvāraś ca[1041] *saṃyogaṃ* | *vidyād vyañjana-saṃyogaṃ*[1042] ‖19‖

音節は (原則として) 重い (1039)。短母音［から成る音節は］軽い，もし（子音）結合が後続しないならば (1040), そして anusvāra が［後続しないならば］(1041)。結合というのは子音の結合であると知るべきである (1042)。

guru dīrghaṃ[1043] ***garīyas*** *tu* | *yadi savyaṃjanaṃ bhavet*[1044] |
laghu savyaṃjanaṃ hrasvaṃ[1045] | ***laghīyo*** *vyaṃjanād ṛte*[1046] ‖20‖

長い［母音から成る音節は］重い (1043)。しかしもし子音を伴えば，より重くなる (1044)。子音を伴う短い[母音から成る音節は]軽い (1045)。子音が無ければ［その音節は］より軽い (1046)。

4.3.2. Ṛk-Tantra 49–50

guru を規定するが不完全であり，また，laghu の規定を欠く。(*saṃyoga*, *laghu*, *dīrgham* は *saṇ*, *ghu*, *gham* に短縮され中性名詞として用いられる。)

49. ***guru** saṇi.*
子音結合 (*saṇ* = *saṃyoga*[57]) の前では［音節は nt.］重い。

50. (II 5,10) *gham*［= *dīrgham*］.
長い［母音 (長母音・guṇa・vṛddhi)[58] から成る音節 nt.］は［重い］。

4.3.3. Taittirīya-Prātiśākhya XXII 14 [Triṣṭbh/Jagatī]–15 [Śloka]

14 と 15 とは TaitPrś として例外的に韻文であり，二次的な補遺の可能性が高い。15 (Śloka) は 14 (Triṣṭbh/Jagatī]) と内容が重複し，14 より更に後の追加と推測される。14 *saṃyoga-pūrvaṃ* :: 15 *a-saṃyoga-pūrvaṃ*, 14 *anunāsikam* :: 15 *an-anusvāra-saṃyuktam* の対比に注意。TaitPrś において *anunāsika-* は形容詞「鼻孔を通って響く」として用いられる。[59] 14 では nt. *akṣara-*「音節」を修飾し，具体的には「anusvāra を伴う音節」を指す。

---

[57] Cf. sūtra 27 (II 3,7) *sayuk saṇ* [= *saṃyogam*].「結合された子音が *saṃyoga-*である。」

[58] Comm.: *dīrghaṃ ca guru-saṃjñaṃ bhavati | e o ai au prabhṛtīni ||*

[59] Cf. TaitPrś II 30 *anusvārottamā anunāsikāḥ.*「anusvāra および［閉鎖音列 varga の］最後の音たち（鼻音：*ṅ*, *ñ*, *ṇ*, *n*, *m*）が，鼻孔を通って響く（***anunāsika-***）［音たち（*kāra-* m. cf. 先行詩節）］である」。Cf. Ed. Whitney p.66–70, p.401; Cardona Fs. Kumamoto p.45 (: 7.4.2 d.) n.116 (Whitney loc. cit. への反論) 。Cardona loc. cit. "… the metre of the verse would be more appropriate with ***tathānusvāram*** instead ***tathānunāsikam***" には同意しがたい。***tathāsunāsikam*** による Jagatī pāda の Triṣṭubh 詩節混在とは珍しくないが，Cardona の提唱する ***tathānusvāram*** は Triṣṭubh として異例の cadence –––– (guru 4連続) を示し，韻律的により不適切である。

このようなanunāsika の用法はCaturĀ I 53 (→ **4.3.5.**, 注**61**) および I 83f. (→ **5.3.5.**, 注 **79**) と共通する。anunāsika と anusvāra 全般については注 **14** 参照。

14. *yad vyañjanāntaṃ yad u cāpi dīrghaṁ* ¦ ***saṃyoga-pūrvaṃ*** *ca tath**ānunā-sikam*** | *etāni sarvāṇi gurūṇi vidyāc* ¦ *ccheṣāṇy ato 'nyāni tato laghūni* ‖

子音を最後に持つ［音節］，また長い［母音から成る音節］，子音結合に先行する［音節］，同様に**鼻孔を通って響く(*anunāsika-*)**［音節］**(anusvāra** を伴う音節)，これらすべては重いと知られるべきである。残りの，これと異なる［音節たち］は，それ故，軽い。

15. *a-vyañjanāntaṃ yad dhrasvam* ¦ ***a-saṃyoga-paraṃ*** *ca yat* | *an-**anusvāra**saṃyuktam* ¦ *etal laghu nibodhata* ‖

子音を最後に持たない［音節］は軽い，子音結合により後続されない［音節］もまた［軽い］。**anusvāra** と結合していない［音節もまた軽い］。これを軽い［音節］と（君たちは）理解せよ。

4.3.4. Vājasaneyi-Prātiśākhya IV 109

「軽重」の規定を欠く一方，韻律上「重」とされる条件下にある「母音が」2 マートラーを持つと規定する。[60] 諸音素の発音時間としてのマートラー規定 (→ **4.3.4.**) とは独立して，韻律次元での母音のマートラー規定が現れる (→ **4.2.3.**)。

saṃyoga-pūrva-vyañjanāntāvasāna-gatāḥ svarā dvimātrāḥ.
子音結合の前にある，［または］子音で終わる，［または］休止位置にある，母音たちは **2** マートラーを持つ。

[60] Cf. Allen p.86 n.4.

4.3.5. Caturādhyāyikā (Ed. Whitney) I 51–54

TaitPrś XXII 14f. (→ **4.3.3.**) に類似し，*anunāsika*-の用法も共通する (→ 注 **61**)。

51.　*hrasvaṃ laghv asaṃyoge*.
短い［母音から成る音節: nt. *akṣara*-］は軽い，子音結合の前でなければ。

52.　*gurv anyat*.
他の［音節］は重い。

53.　*anunāsikaṃ ca*.
鼻孔を通って響く（*anunāsika*）[61]［音節］もまた［重い］。

54.　*padānte ca*.
また語末においても［音節は重い］。

---

[61] TaitPrś II 30 (→ 注 **59**), XXII 14 (→ **4.3.3.**), CturĀ I 83f. (→ **5.3.5.**, 注 **79**) と同様に, anunāsika- が形容詞「鼻孔を通って響く」として用いられる。Cardona Fs. Kumamoto p.46f. (: 7.4.4) は異なる見解を示す: "Moreover, a nasalized vowel (*anunāsikam*) also is called *guru*, as is a vowel in wordfinal (*padānte*) position. That is, the nasalized vowel of *aṁhasaḥ* 'danger' (abl. sg.) is **phonologically a short vowel** but **metrically** the first syllable of this item **counts as heavy**." 即ち anunāsika を「鼻母音」と解し，音韻的には「短母音」であるが韻律上は「重」とみなすという二重規範を説くが，この解釈には無理がある（→ 注 **79**)。また, Deshpande p.189 Note が述べる，中期インドアーリャ語における anusvāra と anunāsika との区別（先行母音を重または軽にする）は，ここでは問題とならない。

5. マートラー *mā́trā-*「(発音に要する）時間単位」の成立と発展

5.1. Pāṇini 文法では母音の長さとして 3 種（短 *hrasva-*，長 *dīrgha-*，延長 *pluta-*），さらに（音節の）軽重（*laghu-* / *guru-* → **4.1.**）が規定されるが，マートラー ***mātrā-*** という術語（女性名詞）ないし概念は現れない。

Aṣṭādhyāyī 第 1 章 2,27f.

27. *ūkālo* (= *u-ū-ū3- kālo*) *'j jhrasva-dīrgha-plutaḥ*.
u, *ū* または pluta *u* の発音時間を持つ母音（*ac*- m.）は，短い，長い，または，延長された［母音］（sg. m.）である。

28. *acaś ca*.
そして［それは］母音 (*ac*-) の代わりに［適用される］。

5.2. 韻律学では，***laghu-***「軽」(男性名詞・形容詞) は **1 mātrā**，***guru-***「重」（男性名詞・形容詞）は **2 mātrā** とみなされる（→ **4.**, **4.2.1.–4.2.3.**）。母音・子音等の個々の音素が持つマートラー数は考慮されない。

Piṅgala の Chandaḥsūtra はマートラーに基づく韻律（Āryā 類, Vaitālīya 類, Mātrāsamaka 類）の定義に，術語として ***mātrā-*** ではなく ***laghu-***「軽」を用いる。MIA 韻律の特徴である *mātrā-* という概念・語の忌避は，ヴェーダ補助学 Vadāṅga としての保守性を反映していると思われる。

5.3. Prātiśākhya 文献における mātrā 規定

TaitPrś 第 1 章では，「発音持続時間」を表す術語として *mātrā-* ではなく ***hrasva-***「短い（母音の長さ)」が用いられる。TaitPrś の他章および他学派の Prś では，母音の発音時間の単位として *mātrā-* が使用され (1 hrasva = 1 mātrā)，さらに，子音，anusvāra と anunāsika, visarjanīya，休止などの音韻要素にも適用が拡大される。<u>韻律学の場合とは対照的に，音節全体</u>

<u>に対しては **mātrā** が適用されない</u>。また **mātrā** と **guru, laghu** の関係付けもない； 例外的に，VjPrś IV 109 は，guru に対応する条件下で「母音が 2 mātrā を持つ」と表現する（→ **4.3.4**）。

5.3.1. Ṛgveda-Prātiśākhya (M: Max Müller, T: Tripāthī, V: Verma)

A) 第 1 章 16 (M 28‒32; T/V 27‒31)［Jagatī (ab) + Triṣṭubh (cd)］
mātrā hrasvas (28) *tāvad* ***avagrahāṃtare*** (29) ¦ *dve dīrghas* (30) *tisraḥ pluta ucyate svaraḥ* (31) | *adhaḥ svid āsī3d upari svid āsī3d* ¦ *arthe pluti bhīr iva viṃdatī3 triḥ* (32) ||
(1 つの) 短い (母音 *svara*-: sg. m.) が (1 つの) mātrā (sg.f.) である (28) 。**avagraha の間では, 同量 (1 mātrā)** である (29)。(1つの) 長い (母音) は 2［mātrā］(du. f.) である (30)。(1 つの) 延長された (*pluta*-) 母音 (*svara*-: sg.m.) は 3［mātrā］(pl.f.) であると言われる (31)。延長母音 (*pluti*-) は (特定の) 文意において (*arthe*)［RV に］3 回［用いられる］: “*adhaḥ svid āsī3d upari svid āsī3d*” (RV X 129,5b 疑問文), “ *bhīr iva viṃdatī3*” (X 146,1d 疑問文) (32)。

B) 第 1 章 17 (M 33‒38; T/V 32‒37) ［Triṣṭubh (ad) + Jagatī (bc)］
svarabahktiḥ pūrvabhāg akṣarāṃgaṃ (33) ¦ *drāghīyasī sārdhamātrā* (34) *itare ca* (35) | *ardhonānyā* (36) *rakta-samjño ‘nunāsikaḥ* (37) ¦ *saṃyogas tu vyañjanasaṃnipātaḥ* (38) ||
svarabhakti は先行する (子音) の一部であり，(先行子音の属する) 音節の附属物である (33)。より長い［svarabhakti］は半 mātrā を伴う (34)。他方の［音 (*kara*- m.) たち，すなわち svarabhakti に先行する子音たち］もまた［半 mātrā を伴う］(35)。他の［svarabhakti］(sg.f.) は半分不足する (すなわち 4 分の 1)［mātrā］である (36)。anunāsika は「染められた (*rakta*-)」という名称を持つ (37)。結合 (*saṃyoga*-) とは，他方，子音の集合である (38)。

C) 第 15 章 3 (M 1039‒1042; T/V 5)［Triṣṭubh］*om* の発声 (→ **5.3.3.B**, 注 **77**)
sa o3m iti prasvarati trimātraḥ ¦ *prasvāra sthāne sa bhavaty udāttaḥ* |

caturmātro vārdhapūrvānudāttaḥ | *ṣaṇmātro vā bhavati dviḥsvaraḥ san* ‖
彼（師 ; cf. 先行詩節 *guruṃ*）は om と声を発する。[om という] 音響は 3 mātrā を持ち,［発音］階梯に (*sthāna-*) おいて udātta (高)アクセントとなる。[62] あるいは, 4 mātrā を持ち, 前半はanudātta (低)アクセントを持つ。あるいは, 6 mātrā を持つものとなる，2 つの svarita (高低)アクセントを持っている場合は。

5.3.2. Ṛktantra 28-45 (II 3,8–5,5)

サーマヴェーダ学派に属する本書は, サーマン歌詠方法 (*vṛtti-*: *drutā-* 速い，*madhyamā-* 中位，*vilambitā-* ゆっくり）による発音時間の変化を考慮して, 韻律上の発音時間 mātrā と実際の発音時間 (kalā「時間の部分」, paramāṇu「最小時間」）とを区別して規定する。gati (サーマン歌詠に差し挟まれる stobha 母音の延長) の考察も特徴的である。しかし RvPrś とは対照的に pluta/pluti に言及しない。[63] pluta/pluti の替りに *vṛddha-*「二重母音 *ai* / *au*」の mātrā 数が規定される。奇妙なことに，母音 (*svara-* m.) の mātrā 数規定において, 男性形ではなく中性形 *dīrgham* (43) と *vṛddham* (44) が現れる。この両形は *akṣara-* nt. の形容詞と解釈される。この場合, *akṣara-* は「音節」ではなく「韻律構成単位としての母音」を意味すると推測される（→ **4.** 注 **52**）。TaitPrś I 35f. と VjPrś I 57f. では同様のスートラで男性形 *dīrghaḥ*, *vṛddhaḥ* が現れる（→ **5.3.3., 5.3.4.A**）。子音の発音時間は 1 mātrā と半 mātrā のどちらでも良いとする。

28. (II 3,8)　*mātrārdhamātrā vā.*
［子音 (20. vyañjanam) は］1 mātrā または半 mātrā である。

---

[62] Cf. Uvaṭa 註 *sa guruḥ om iti prasaravati śabdaṃ karoti*… ; Ed. M. Müller “Der Lehrer erwiedert: Om! Diese Erwiederung besteht aus drei Mâtrâs, und sie ist udâtta in der betreffenden Scala”. *sthāna-* に関しては Renou s.v. 参照。

[63] Sūrya Kānta によると，Ṛktantra 全体を通じて pluta/pluti への言及が無い。

29. (II 3,9)　*tiś*［= *gatiś*］*ca trikalā vā*.
gati (Stobha 母音延長) もまた［1 または半 mātrā である］, あるいは 3 kalā である。

30. (II 3,10)　*sandhyād yaś ca*.
二重母音 (e/o) の後で，音素 (comm. *varṇa*-) もまた［3 kalā である］。[64]

31. (II 4,1)　*drutāyāṃ mātrā*.
速い［朗唱方法 (*vṛtti*-)］では 1 mātrā は［3 kalā である］。

32. (II 4,2)　*catuskalā madhyamāyām*.
中位の速さの［朗唱方法 (*vṛtti*-)］では［1 mātrā は］4 kalā である。

33. (II 4,3)　*pañcakalā vilambitāyām*.
ゆっくりとした［朗唱方法 (*vṛtti*-)］では［1 mātrā は］5 kalā である。

34. (II 4,4)　*varṇāntaraṃ paramāṇu*.
音素間隔は最小［時間］(*paramāṇu*-: comm. 半 kalā) [65] である。

35. (II 4,5)　*svarayor ardhamātrā*.
（連続する）2 母音の [音素間隔は] [66] 半 mātrā である。[67]

36. (II 4,6)　*virāme mātrā*.
休止 (単語群間の休止)[68] においては［音素間隔は］1 mātrā である。

37. (II 4,7)　*nityavirate dvimātram*.

---

[64] Comm.: *sandhyāś ca varṇas trikalo bhavati | ekāraukārayoḥ* ||

[65] Comm.: *varṇāntaraṃ paramāṇu bhavati | tat kalārdham* ||

[66] Sūrya Kānta "pause for hiatus".

[67] Comm.: *svarayor antaram ardhamātrā bhavati* | ◦*miṇādīni* (1,572) ||

[68] Sūrya Kānta "pada pause".

恒久的休止 (文末，ないし pāda または pādayuga 末)[69] において［音素間隔は］2 mātrā を持つ。

38. (II 4,8)　*gāthāsu*.
Gāthā たち (pl.) において［上記 37 が適用される］。[70]

39. (II 4,9)　*trimātraṃ sāmasu*.
Sāman たち (pl.) において［休止における音素間隔は］[71] 3 mātrā を持つ。

40. (II 4,10)　*akālo hrasvaḥ*.
a の発音時間は短い。[72]

41. (II 5,1)　*ardham aṇu*.
（その）半分が *aṇu-* である。[73]

42. (II 5,2)　*mātrā*.
［*a* の発音時間 *hrasva-*が］1 mātrā である。

43. (II 5,3)　*dve **dīrgham***.
長い［母音］(nt. sg.; *akṣara-* (→ **4.** 注 **52**))は 2［mātrā］である。Cf. TaitPrś I 35 (→ **5.3.3.**), VjPrś I 57 (→ **5.3.4.A**)

44. (II 5,4)　*tisro **vr̥ddham***.
成長した［母音］は (*vr̥ddham* nt.sg.) 3［mātrā］である。Cf. TaitPrś I 36 (→ **5.3.3.**), VjPrś I 58 (→ **5.3.4.A**)

---

[69] Comm.: *ardharcāntargateṣu*; Sūrya Kānta “verse pause”.

[70] Comm.: *gāthāsu ca dvimātram antaraṃ* (*nityavirate*) *bhavati* | …

[71] Comm.: *trimātram antaraṃ sāmasu veditavyaṃ bhaktyanteṣu* ‖

[72] Comm.: *akārakālo varṇo hrasvo bhavati* | *a i u r̥ ity ete* ‖

[73] Comm.: *ardham akārakālo aṇusaṃjño bhavati* | *svarita-vinata-praṇtābhir gīteṣu* ‖

45. (II 5,5) *vaisvarye svaras trimātrāḥ* ‖
Vaisvarya (音調多様性)[74] において母音 (*svara*- m.sg.) は3 mātrā を持つ。[75]

5.3.3. Taittirīya-Prātiśākhya I 31–37, XVIII 1, XXII 13

A) 第1章31–37: 音 *kāra*- m. (母音 *svara*-, *anusvāra*-,子音 *vyañjana*-) の発音時間 (*kāla*-) を **mātrā** ではなく **hrasva** を単位として定める。**anusvāra** の発音時間が短母音と等しい。

31. *r̥kāra-lkārau hrasvau.*
r̥ 音と *l̥* 音とは短い。

32. *akāraś ca*.
a 音もまた［短い］。

33. *tena ca samānakālasvaraḥ.*
それ（短い *a* 音）と同じ（発音）時間を持つ母音（*svara*-）もまた［短い］。

34. ***anusvāraś ca.***
anusvāra もまた［短い］。

35. *dvis tāvān dīrghaḥ*.
長い（*dīrgha*-）［母音は］その2倍である。Cf. RkTantra 43 (→ **5.3.2.**).

36. *triḥ plutaḥ*.
延長された（*pluta*-）［母音］は3倍である。Cf. RkTantra 43 (→ **5.3.2.**).

---

[74] Cf. Renou s.v. vaisvarya "division de ton, diversence tonique".

[75] Comm.: *vaisvarye svaras trimātro* (v.l. *trimātrā*) *bhavati* | *dyutā-dīni* (1,83) ‖

37. ***hrasvārdhakālaṃ vyañjanam.***
子音は短［母音］の半分の発音時間 (*kāla-*)[76] を持つ。

B) 第 18 章 1: *om* における *o* 音は 2.5 mātrā という説を紹介する[77]。

okāraṃ tu praṇava eke 'rdhatṛtīyamātraṃ bruvate ‖

しかし *o* 音は praṇava (*om*) において 2.5 mātrā を持つとある者たちは言っている。

C) 第 22 章 13: 休止 *virāma-* の持続時間（mātrā 数）

ṛg-virāmaḥ pada-virāmo vivṛtti-virāmaḥ samāna-pada-vivṛtti-virāmas tri-mātro dvi-mātra eka-mātro 'rdha-mātra ity ānupūrvyeṇa ‖

詩節（*ṛc-*）の休止，単語（*pada-*）の休止，sandhi による母音連続間の休止, 同一語中の母音連続間の休止は, 順次, 3 mātrā, 2 mātrā, 1 mātrā, 0.5 mātrā である。

5.3.4. Vājasaneyi-Prātiśākhya I 55–61, IV 147–149, V 1

A) I 55–61 : *aṇu-* = 1/4 m.，*paramāṇu-* = 1/8 m. の設定が RkTantra 34, 41(→ **5.3.2.**)と相違する。

55. *a-mātra-svaro hrasvaḥ.*
a と（発音時間）同量の母音 (m. *svara-*) は短い。

---

[76] Cf. TaitPrś XVII 5 *vyaṇjana-kāla-*「子音の持続時間」.

[77] *om* 全体の発音時間は 3 mātrā となる。RvPrś では 3，4 ないし 6 mātrā (→ **5.3.1.B**) とされるが，諸説ある：[3 mātrā] Mbhāṣ VIII 2.39，[3.5 mātrā] Mātrālakṣaṇam I 5 (竹崎隆太郎氏の御指摘に感謝する)；［3 ないし 3.5 mātrā］Yogavivaraṇa（Patañjalayogaśāstra I 28 注：張本研吾氏の御指摘に感謝する)。

56. *mātrā ca.*
また［これが］1 mātrā である。

57. *dvis tāvan dīrghaḥ.*
長い［母音］はその 2 倍（2 mātrā）である。Cf. RkTantra 43 (→ **5.3.2.**), TaitPrś I 35 (→ **5.3.3.**).

58. *plutas triḥ.*
延長された［母音］は 3 倍 (3 mātrā) である。Cf. RkTantra 44 (→ **5.3.2.**), TaitPrś I 36 (→ **5.3.3.**).

59. *vyañjanam ardhamātrā.*
子音は半分のマートラーを持つ (1/2 mātrā)。

60. *tad-ardham aṇu.*
その半分 (1/4 mātrā) が *aṇu-* (nt.) である。Cf. RkTantra 41 (→ **5.3.2.**).

61. *paramāṇv ardhāṇu-mātrā.*
aṇu の半分 (1/8 mātrā) が *paramāṇu-* (nt.) である。Cf. RkTantra 34 (→ **5.3.2.**).

B) IV 147−1491, 1/2, 1/4 mātrā の持続時間; 母音 + anusvāra の mātrā 数

147. *mātrārdhamātrāṇumātrā varṇapattīnām.*
音素の発生 (*varṇāpatti-*)[78] たちには 1 mātrā, 1/2 mātrā, 1/4 mātrā［の持続時間］がある。

148. *anusvāro hrasvapūrvo 'dhyardhamātrā pūrvo cārdhamātrā.*
短母音を先に持つ anusvāra は 1.5 mātrā, また，先行する［短母音］は 0.5 mātrā である。

---

[78] Cf. Whitney “sounds which take the place of other sounds”.

149. *dīrghād ardhamātrā pūrvā cādhyardhā*.
長母音の後の［anusvāra は］0.5 mātrā，また，先行する［長母音は］1.5 mātrā である。

母音の長短に関わらず，母音＋**anusuvāra** の合計が **2mātrā** になる。これは, **1** 音節の **mātrā** 総数が **2 mātrā** を越えてはならないという **MIA** の「**mātrā** の法則」，および 重音節 **guru = 2 mātrā** という韻律規定と一致する。(anusvāra の音長に関しては注 34 参照)。

C) V 1: avagraha の持続時間

samāse 'vagraho hrasvasamakālaḥ.
複合語において avagraha は短母音と同じ（持続）時間を持つ。

5.3.5. Caturādhyāyikā I 59–62, 83f., 101f. : 子音の持続時間を **1 mātrā** とする。**anunāsika** と **avarabhakti** の規定を示す。

59. *ekamātro hrasvaḥ*.
短母音は 1mātrā (の持続時間) を持つ。

60. *vyañjanāni*.
諸子音 (pl.) は［同様に各 1 mātrā を持つ］。

61 *dvimātro dīrghaḥ*.
長母音は 2 mātrā（の持続時間）を持つ。

62 *trimātraḥ plutaḥ*.
延長母音は 3 mātrā（の持続時間）を持つ。

83. *anunāsiko 'ntaḥpade hrasvaḥ*.

語中において短い［母音］が鼻孔を通って響く(*anunāsika*-)。[79]

84. *dīrgho napuṃsakabahuvacane.*
中性複数形においては長い［母音が鼻孔を通って響く］。
［以下 91.まで anunāsika 長母音が列挙される。］

101. *rephād ūṣmaṇi svarapare svarabhaktir akārasyārdhaṃ caturtham ity eke.*
r の後かつ *ūśman*- (*h*, *ś*, *ṣ*, *s*, *ḥ*, *h̲*, *ḫ*) の前で，母音に後続される svarabhakti は *a* 音の半分（の持続時間）である。ある者たちは 1/4（の持続時間）［と言っている］。

102. *anyasmin vyañjane caturtham aṣṭaṃ vā.*
他の子音の前では［svarabhakti は］1/4 または 1/8（の持続時間）である。

---

[79] anunāsika の形容詞的用法については, Cf. TaitPrś II 30 (→ 注**59**), XXII 14 (→ **4.3.3.**), CaturĀ I 53 (→ **4.3.5.**, 注**61**). anunāsika と anusvāra 全般に関しては注**14** 参照。スートラ 83–91 はまだ検討途中であり，暫定的な訳を挙げた。「マートラー」ないし「軽重」との関係についても結論に至っていないが，*pataṅgá-*, *páñca-*, *gandhá-*, *haṁsá-*, *siṁhá-* 等の語において，子音結合前肢鼻音ないし anusvāra の前で，短母音が鼻音化される現象を述べていると解した。鼻音化された短母音（1 mātrā）と鼻音・anusvāra (1 mātrā) の全体で 2 mātrā となり，韻律的には guru「重」である（→ **4.3.5. CaturĀ I 53**, 注 **61**, **5.3.4.B** VjPrś IV 148f.）。Deshpande および Cardona は本スートラの anunāsika を，後続鼻音により鼻音化されると同時に後続鼻音を吸収融合した「鼻母音」“nasalized (nasal) vowel” とする。Cf. Ed. Whitney p.73 “a nasalized vowel occurring in the interior of a word is short” (TaitPrś XVI 1-31, XIII 8-14 に言及); Ed. Deshpande p.230f. “… such a vowel as discussed here is a nasal vowel, instead of being a pure vowel followed by *anusvāra*”; Cardona Fs. Kumamoto p.46f. (: 7.4.3−7.4.4) “… the nasalized vowel of *aṁhasaḥ* … is phonologically a short vowel but metrically the first syllable of this item counts as heavy” (→ 注 **61**)。

5.4. Prātiśākhya における mātrā 規定のまとめ（サーマン歌詠に固有の音長規定を除く）

1) 短母音 (*hrasva-*): **1 hrasva** RkTantra 40, TaitPrś I 31–33;
1 mātrā RvPrś I 16, RkTantra 42, VjPrś I 55f., CaturĀ I 59.

2) 長母音 (*dīrgha-*; guṇa と vr̥ddhi とを含む): **2 hrasva** TaitPrś I 35;
2 mātrā RvPrś I 16, RkTantra 43 (vr̥ddhi を除く), VjPrś I 57, CaturĀ I 61.

3) 延長母音 (adj. m. *pluta-*/f. *pluti-*): **3 hrasva** TaitPrś I 36;
3 mātrā RvPrś I 16, VjPrś I 58, CaturĀ I 62.

4) vr̥ddha 母音 (vr̥ddhi) : **3 mātrā** RkTantra 44.

5) *om* (praṇava): **3, 4, 6 mātrā** RvPrś XV 3; **3 mātrā** (*o* 2.5 mātrā + *m* 0.5 mātrā) TaitPrś XVIII 1 (→ 注 **77**).

6) 子音の発音時間は一般に短母音の半分（0.5 hrasva/mātrā）とされるが，RkTantra は 0.5 m. または 1 m.，CaturĀ は 1 m.とする。
0.5 hrasva (*hrasvārdha-kāla*) TaitPrś I 37.
0.5 mātrā RVPrś I 17, VjPrś I 59.
0.5 または **1 mātrā** RkTantra 28.
1 mātrā CaturĀ I 60.

7) anusvāra: **1 hrasva** TaitPrś I 34; **1.5 mātrā** (短母音の後)，**0.5 mātrā** (長母音の後) VjPrś IV148f. (→ **3.4.2.** RkTantra，注 34).

休止や svarabhakti に関しては学派毎の相違が大きい。SV 学派に属する RkTantra は gāthā と sāman とでは異なる休止時間を定める。

8) svarabhakti: **1/2** または **1/4 mātrā** RkPrś I 17; *a* 音の **1/2**, **1/4**, または **1/8** CaturĀ I 101f.

9) avagraha (複合語の中) : **1 mātrā** RvPrś I 16, VjPrś V 1.

10) 休止 (*virāma-*): 単語群の間 **1 mātrā**, 文末・pāda 末 (gāthā) **2 mātrā**, sāman における休止 **3 mātrā** RkTantra 35−39; 詩節 (*ṛc-*)の後 **3 mātrā**, 単語 (*pada-*)の後 **2 mātrā**, sandhi による母音連続の区分分割 (*vivṛtti-*) **1 mātrā**, 同一語中の母音連続の区分分割 (*samānapadavivṛtti-*) の休止 **0.5 mātrā** TaitPrś XXII 13. (RvPrś, VājPrś, CaturĀ 未確認)

Prātiśākhya は音節全体の mātrā 数を問題にしない。また，軽重の規定 (→ **4.**) と mātrā とを結びつけない。例外的に VjPrś IV 109 が guru に対応する条件下において「母音が **2 mātrā** を持つ」と規定する (→ **4.3.4.**)。

仮に krama/yama を考慮せずに音節の各音韻要素の一般的な規定に則して計算すると，1 音節は 1 mātrā から 3.5 mātrā を含むことになる。

1) 短母音のみ = 1 mātrā, e.g. *u*, *á-tas* の第 1 音節
2) 先行 1 子音 + 短母音 = 1.5 m., e.g. *ná*
3) 先行 2 子音 + 短母音 = 2 m., e.g. *prá*
4) 短母音 + 後続 1 子音 = 1.5 m., e.g. *íd*
5) 先行 1 子音 + 短母音 + 後続 1 子音 = 2 m., e.g. *tád*
6) 先行 2 子音 + 短母音 + 後続 1 子音 = 2.5 m., e.g. *tríḥ*
7) 長母音のみ = 2 m., e.g. *ā́*
8) 先行 1 子音 + 長母音 = 2.5 m., e.g. *vā*
9) 先行 2 子音 + 長母音 = 3 m., e.g. *prā-ṇáḥ* (3m. + 2m.)
10) 長母音 + 後続 1 子音 = 2.5 m., e.g. *āp-tā́ḥ* (2.5m.+ 2m.)
11) 先行 1 子音 + 長母音 + 後続 1 子音 = 3 m., e.g. nom. sg. *vāk*.
12) 先行 2 子音 + 長母音 + 後続 1 子音 = 3.5 m., e.g. acc.sg. *tvā́m*.

Prś では karma/yama により，母音間の 2 子音連続は 3~4 子音連続に，3 子音連続は 4~5 子音連続になることが多く, 1 音節の mātrā 数が増加し, 4 mātra 以上になることも稀でない。

6. まとめ

「音節」とその「軽重」という概念は，ともに韻律上の必要から成立した。ヴェーダ文献において最も重要な役割を担うのはリグヴェーダ等の韻文マントラであるが，これらの韻文の成立条件は「韻律構成単位」としての「音節（原義：流動しないもの）」*akṣára-* である。この段階では「音節」と「音節の基盤である母音」との区別は必らずしも明確でなかったと考えられる。ヴェーダ末期に位置する Prātiśākhya 文献では，音節を母音，子音等の諸音素に分析し，構造と境界を解明し，諸音韻要素の発音時間をマートラーにより規定する営みが見られる。

ヴェーダ韻律は一定数の「音節」の規則的な反復を本質とするが，「音節」の数だけでなく，個々の音節の「（発音時間の）量」の相違も意識される。母音自身の長さ（短，長，延長）だけでなく，後続する子音の数や休止位置も「量」を決定することが認識され，「軽い（音節・母音）」*guru-* nt./m. と「重い（音節・母音）」*laghu-* nt./m.の区別が成立する。韻律上,「重」*guru-* は「軽」*laghu-* の 2 倍に等しいとされる。

「軽重」の定義は，文法学，音韻学，韻律学などに早くから現れるが，Prātiśākhya における音節の分析や，諸音素の発音時間としてのマートラーの規定とは無関係である。母音に後続する音素や母音の位置により決定する「母音の重さ」を出発点として「韻律構成単位としての音節の重さ，軽重」に発展したと推測される。いずれにせよ「軽重」は Prātiśākhya における音節分析や音素のマートラー規定よりも成立が古く，幅広く普及していた様子が窺える。「軽重」の組み合わせによるリズムは韻律の重要な構成要素となり，時代と共に多様化し，Skt 韻律へと発展する。

また母音間の子音結合の扱いが「軽重」と「音節」，さらに「文字表記」により異なり，成立状況の差を反映することも注目される：1)「軽重」の決定には，子音結合の全体が先行母音に関係する (例 *agn-iḥ*) ；2) 音韻学における音節境界では，子音結合の始めの子音は先行母音に，

終わりの子音は後続母音に属する (例 *ag-niḥ*) ; 3)「音節文字」では，子音結合の全体が後続母音に属する (例 *a-gni-ḥ*)。

他方，短母音の長さから出発して mātrā「（発音持続の）時間単位」という概念が成立する（1 hrasva ＝ 1 mātrā）。正確な発音を考察する音韻学において，母音のみならず，子音，Anusvāra, 休止等，すべての音韻要素に対して発音持続時間がマートラーにより規定される方向に向う。しかし，音節全体のマートラーは考慮されず,「軽重」とも関連づけられない（VjPrś は例外的に「重」に対応する母音を 2 mātrā と規定）。

ヴェーダより後の韻律では，韻律上の時間単位としてマートラーが普及し（1 laghu = 1 mātrā，1 guru = 2 mātrā）, 1 guru と 2 laghu との置換が起こる。この現象の背景には「マートラーの法則」に支配される中期インドアーリャ語と，音楽的リズムを特徴とするマートラー韻律の発展と普及が想定される。

「音節」「軽重」「マートラー」はいずれも韻律において基本となる概念であるが，韻律学のみならず，文法学，音韻学においても議論の対象とされた。それらの見解は相互に一致することもあり，食い違うこともあるが，韻律学，文法学，音韻学のそれぞれの立場と視点の違いに起因するように思われる。学派毎に作成された Prātiśākhya は，伝承された saṁhitā-pāṭha や pada-pāṭha などから正しくマントラを作り発音することを目的とする。文法学は抽象された語根から現実のヴェーダおよび古典 Skt テキストに現れる語形を導き出す具体的プロセスを実用的に体系化する。一方，韻律学は，ヴェーダ語が既に形骸化し，文語としては古典 Skt や叙事詩 Skt が, 日常語としては初期 MIA が発展しつつある時代に, 宗教的および世俗的文学において実際に作詞する技法を扱う。いずれも実践的なヴェーダ学の一分野であるが, 成立した時代や目的の相違が「音節」や「軽重」や「マートラー」の規定に反映されている。

略語

Prātiśākhya [Prś], R̥gveda-Prātiśākhya [RvPrś], R̥k-Tantra-Vyākaraṇa [RkTantra], Taittirīya-Prātiśākhya [TaitPrś], Vajasaneyi-Prātiśākhya (Kātyāyanīya-Prātiśākhya) [VjPrś], Atharvaveda-Prātiśākhya [AvPrś], Caturādhyāyikā [CaturĀ]

参考文献（本稿において筆者が直接に使用参照した文献に限定）

1. 韻律（学）

A. Weber: "Über die Metrik der Inder. Zwei Abhandlungen", Indische Studien VIII, 1863: 1. Vedische Angaben über Metrik (p.1－156) [Śāṅkhāyanaśrautasūtra 7, 27 (p.78ff.), Nidānasūtra I 1–7 (p.83ff.), R̥kprātiśākhya 8 (p.126f.), 16–18 (p.127ff.), R̥ganukramaṇī (p.125ff.), Anukramaṇī des R̥ik und des weissen Yajus (p.135ff.), Piṅgala's chandaḥsūtra (p.144–152)]; 2. Das chandaḥsūtram des Piṅgala (p.157–457).

Pt. Kedaranātha: Chandahśāstram of Pingalanāga with 'Mr̥tasañjīvani' vr̥tti of Halāyudha Bhatta and 'Chandonirukti' of MadhusudanaVidyāvācaspati, Parimal Sanskrit Series No. 6, Delhi 1985, rep. 1994.

Haridāsa Siṃharāya: Chandaḥsūtrabhāṣyam, Śrīyādavaprakāśakr̥tam, Esyāṭika Sosāīṭi 1977.

Jīvānandavidyāsāgara: Piṅgalacchandaḥsūtram Piṅgalācāryyakr̥tam, Śrīhalābhaṭṭakr̥tam r̥tasañjīvanyākhyavr̥ttisahitam, Vācaspatyayantra 1928.

Viśvanātha Śāstrī: Chhandah Sūtra of Pingala Āchārya with the commentary of Halāyudha, Bibliotheca Indica, Calcutta 1871–1874.

H. D. Velankar: Jayadāman (A collection of ancient texts on Sanskrit Prosody

and A Classified List of Sanskrit metres with an Alphabetical Index), Poona Oriental Series 1954.

K. N. Bhatnagar: Nidāna-Sūtra of Patañjali, Lahore 1939 = Delhi 1971.

2. 文法（学）

J. Wackernagel: Altindische Grammatik I, Göttingen 1896, 2. ed. 1957.

R. Pischel: Grammatik der Prakrit-Sprache, Strassburg 1900 = Comparative Grammar of the Prākṛt Language (translated by Jhā), 2. Ed., Benares 1965.

W. Geiger: *Pāli. Literature und Sprache*, Strassburg 1916. (Transl. by Ghosh 1943: *Pāli Literature and Language*; revised by K.R.Norman 1994: *A Pāli Grammar*).

O. Böhtlingk: *Pāṇini's Grammatik*, Leipzig 1887.

F. Kielhorn: The Vyākaraṇa = Mahābhāṣya of Patañjali vol.1, 1st ed. 1880 (= 2. ed. 1892), 3. and revised ed. by K.V. Abhyankar, Poona 1962 (= 4. ed.1985).

G. Cardona: Pāṇini. his Work and its Traditions, vol.1 Bachground and Introduction, Delhi 1988, 2. ed. 1997.

3. Prātiśākhya

3.1. Ṛgveda

F. Max Müller [M]: *Rig-Veda-Pratisakhya*, Das älteste Lehrbuch der vedischen Phonetik, Leipzig 1869.

Rāmaprasāda Tripāthī [T]: Ṛgvedaprātiśākhyam of Maharṣi Śaunaka. With the Commentary of Uvaṭācārya, Varanasi 1986.

Virendrakumar Verma [V]: Ṛgveda-Prātiśākhya of Śaunaka. Along with Uvaṭa-bhāṣya, 2. ed., Dehli 1986.

3.2. Sāmaveda

Surya Kanta (Sūrya Kānta): Ṛktantram. A Prātiśākhya of the Sāmaveda. Critically edited with an introduction, appendices, exhaustive notes, a

commentary called R̥ktantravivr̥ti and Sāmavedasarvānukramaṇī, Delhi 1933, rep.1970.

3.3. Yajurveda Taittirīya 派

W. D. Whitney: "The Taittirīya-Prātiśākhya", Journal of American Oriental Society [JOAS] 9, 1871, p.1–469.

W. D. Whitney: The Taittirīya-Prātiśākhya with its Commentary the Tribhāshya-ratna: Text, Translation and Notes, New Haven 1863, rep. Delhi 1973.

R. Sharma Sastri and K. Raṅgācārya: The Taittirīya-prātiśākhya with the commentaries: Tribhāṣyaratna of Somayārya and Vaidikābharaṇa of Gārgya Gopāla Yajvan with an English introduction and Sanskrit Introduction by K. Raṅgācārya, Delhi 1906.

V. Venkatarama Sharma: Taittirīya-prātiśākhya with the bhāṣya Padakrama-sadana of Māhiṣeya critically edited with appendices, Madras University Sanskrit Series 1, Madras 1930.

3.4. Yajurveda Vājasaneyin 派

A. Weber: "Das Vājasaneyi-Prātiśākhyam", Indische Studien IV, 1858, p.65ff., p.177ff.

Shrimati Indu Rastogi: Śuklayajuḥ-Prātiśākhya of Kātyāyana, critically edited from original manuscripts with English translation of the text, The Kashi Sanskrit Series 179, Varanasi 1967.

Vīrendra Kumāra Varmā: Śuklayajurveda-Prātiśākhyam athavā Vājasaneyi-Prātiśākhyam, Vārāṇasī 1975.

Śrīrām Śarmā: Jyotsnāvr̥tti, commentary on Sukla-Yajurveda Pratisakhya of Katyayana, critically edited with an elaborate introd., notes and appendices by Yugal Kiśore Miśra, Sarasvati Bhavan Granthamala 125, Sampurnanand Sanskrit University, Varanasi 1989.

3.5. Atharvaveda

Vishva-Bandhu Shastri: Atharva-pratiśakhyam, Lahore, Panjab University 1923.

Sūrya Kānta: Atharvaveda Prātiśākhya, (Lahore 1939 ? =) Delhi 1968.

W. D. Whitney: Atharva-Veda Prātiśākhya, JAOS vol.7, 1862, p.333-616 = Chowkhamba Sanskrit Studies vol. XX, Varanasi 2. ed. 1962.

W. D. Whitney: The Atharva-Veda Prātiśākhya or Śaunakīya Caturādhyāyikā. Text, Translation and Notes. Parimal Sanskrit Series no. 38, revised ed. 1994.

Madhav M. Deshpande: Śaunakīyā Caturādhyāyikā. A Prātiśākhya of the Śaunakīyā Atharveda with the commentaries Caturādhyāyībhāṣya, Bhārgava-Bhāskara-Vṛtti and Pañcasandhi. Harvard Oriental Series vol. 52, 1997.

4. その他

Siddheshwar Varma: Critical studies in the phonetic observations of Indian grammarians, London 1929 = rep. 1961.

L. Renou: Terminologie grammaticale du sanscrit, Paris 1942, rep. 1957.

W. S. Allen: *Phonetics in Ancient India*, London 1953 (rep. 1961, 1965).

K. V. Abhyankar: A Dictionary of Sanskrit Grammar, Baroda 1961, 2. revised ed. with J. M. Shukla 1977.

P. Thieme: Kleine Schriften II, Wiesbaden 1971, p.749 = GGA 1958 p.41.

K. Hoffmann: Aufsätze zur Indoiranistik II, Wiesbaden 1976.

H. Scharfe: A History of Indian Literature vol.5, fasc.2, Grammatical Literature, Wiesbaden 1977.

G. Cardona: “Development of nasals in early Indo-Aryan: anunāsika and anusvāra”, Tokyo University Linguistic Papers (TULIP) 33, 2013 (= Fs. Kumamoto), p.3–81.

要旨

ヴェーダ韻律とその後裔である古典サンスクリット韻律は，1 詩節に含まれる音節の数と量（軽重）に基づく。他方，中期インドアーリヤ語起源の韻律はマートラー *mā́trā-*「韻律上の時間単位」により規定される。音節とマートラーはインド韻律の基礎であるが，従来，必ずしも明確に理解されて来なかった。また，文法学，音韻学，韻律学の間には，音節の構造・境界，軽重，マートラーに関して，齟齬する見解が見られる。それらの問題を原典に基づき検証し，次のような全体像を得た。

「音節」とその「軽重」という概念は，ともに韻律上の必要から成立した。ヴェーダ文献において最も重要な役割を担うのは韻文マントラであるが，これらの韻文の成立条件は韻律構成単位としての「音節」*akṣára-* である。この段階では「音節」と「音節の基盤である母音」との区別は不明瞭であったと考えられる。ヴェーダ末期に位置する Prātiśākhya 文献では，音節を母音，子音等の諸音素に分析し，構造と境界を解明し，諸音素の発音時間をマートラーにより規定する営みが見られる。

ヴェーダ韻律は一定数の「音節」の規則的な反復を本質とするが，「音節」の数だけでなく，個々の音節の「(発音時間の）量」の相違も意識される。母音自身の長さ（短，長，延長）だけでなく，後続する子音の数や休止位置も「量」を決定することが認識され，「重い音節（母音）」*guru-* と「軽い音節（母音）」*laghu-* の区別が成立し，「重」は「軽」の 2 倍に等しいとされる。「軽重」の組み合わせによるリズムは韻律の重要な構成要素となり，時代と共に多様化し，Skt 韻律へと発展する。

「軽重」の定義は，文法学，音韻学，韻律学などに早くから現れるが，音韻学における音節の分析や，諸音素の発音時間としてのマートラーの規定とは無関係である。「軽重」の概念がそれらより古く成立し，幅広く普及していたことが窺える。また母音間の子音結合の扱いが「軽重」と「音節」，さらに「文字」により異なり，成立した時代の差を反映することも注目される。

他方，母音の長さから出発してマートラー「(発音持続の) 時間単位」という概念が成立する（1 hrasva = 1 mātrā）。Prātiśākhya 文献では，母音のみならず，子音等，すべての音素の発音持続時間がマートラーにより規定されるに至るが，音節全体には適用されず，また音節の「軽重」も考慮されない。

ヴェーダ以降の韻律では，韻律上の時間単位としてマートラーが普及し（1 laghu = 1 mātrā，1 guru = 2 mātrā），1 guru と 2 laghu との置換が起こる。この背景には，中期インドアーリヤ語およびマートラー韻律の発生と発展が想定される。

キーワード : 音節，マートラー，軽 (laghu)，重 (guru)，韻律，Prātiśākhya，文法学

Abstract

Syllable and Mātrā: basic concepts of Indian metres
observed in indigenous metrics, phonology and grammar

Junko Sakamoto-Gotō

The Vedic metres consist of *akṣára-*, etymologically 'what does not flow (*kṣar*)', hence, 'syllable' or 'syllabic vowel' (RV+). The phonological concept 'syllable' was established and analyzed in the Prātiśākhyas at the final stage of the Vedic language.

Not only the number of syllables (syllabic vowels) but also their weight, i.e. *laghu-* 'light' and *guru-* 'heavy', played an important role in the Vedic and classical Sanskrit metres. The definition of laghu and guru on the metrical level precedes the phonological investigation on the syllable and the mātrā made by the Prātiśākhyas.

Noteworthy is the different treatments of intervocalic consonants by metrics, phonology and writing: 1) laghu/guru: the whole consonants concern the preceding vowel (e.g. *agn-iḥ*); 2) syllabic structure: the former consonant belongs to the preceding vowel, the latter to the following (e.g. *ag-niḥ*); 3) syllabic character: the whole consonants are attached to the following vowel (e.g. *a-gni-ḥ*).

The concept of *mātrā-* 'time unit for pronunciation' has its origin from the vowel length (hrasva 'short vowel' = 1 mātrā, dīrgha 'long vowel' = 2 mātrā, pluta/pluti = 3 mātrā) and extended to other phonemes, even to pauses, but was not applied to the syllable in the Prātiśākhyas. On the other hand, the post-Vedic prosody equated 1 laghu with 1 mātrā and 1 guru with 2 mātrā under the influence of MIA metres measured by mātrā.

[Keywords: syllable, mātrā, guru, laghu, Prātiśākhya, metrics, grammar]